

論文

稲盛和夫の少年時代と鹿児島 の 精神教育
—自彊学舎関係者インタビューから—

吉田 健一〔鹿児島大学稲盛アカデミー特任講師〕

The Boyhood of Kazuo Inamori and the Moral Education of Kagoshima

YOSHIDA Kenichi〔Senior Assistant Professor, Kagoshima University, Inamori Academy〕

キーワード：戦中、精神教育、郷中教育、自彊学舎、西田学区

目次

- 1：はじめに：稲盛和夫と「郷中教育」
- 2：鹿児島時代の稲盛和夫
- 3：戦争時代の鹿児島における精神教育
- 3-1：「郷中教育」と自彊学舎
- 3-2：戦時中の教育と稲盛和夫の少年期
- 4：結びにかえて—薩摩・鹿児島の気風と稲盛和夫—

1：はじめに：稲盛和夫と「郷中教育」

稲盛和夫氏は「郷中教育」について、自伝『ガキの自叙伝』（日経ビジネス文庫・2004年）の中で「…弱虫がまともに育ったのは鹿児島独特の郷中教育で鍛えられた面がある。本来は武士の子弟の寺子屋だ。明治以降も各地域で先輩が後輩の心身を鍛練する場として存続していた。薩摩藩に伝わる示現流の稽古もあった。」⁽¹⁾と述べている。

また、出身の西田小学校同窓会の記念誌『あしたうらら』（西田一九会・穂高書店・2000年）に収められた「西郷と大久保」という文章の中には「…鹿児島では、終戦まで学校教育のほかに、それぞれの町内単位で、郷中教育と呼ばれる独特の教育が行われていた。私も小さい頃に、学舎と呼ばれる施設で、その教育を受けた事を覚えている。そこで私は、初歩的な日本の歴史や中国の古典、または鹿児島独自の剣法である、示現流なども教えてもらった。その中で、薩摩が生んだ偉人である、西郷隆盛について徹底的に教えてもらったことが、特に今でも印象に残っている。」⁽²⁾とある。

そこで筆者は稲盛氏が受けたという当時の、郷中教育（後に記すように厳密に言えばその流れを汲む教育なのだが）の実情について当時を知る方々にインタビューを試みた。筆者が個人的に知りあった松山道氏（自彊学舎常務理事）のご紹介で多くの方が協力して下さった。その一人は崎元吉博氏である。崎元氏は稲盛氏とは小学校4年生時に同じクラスだった方で元教師である。西田小学校の同窓会である西田一九会の責任的な立場を長くお勤めの方である。更に稲盛氏の出身の西田小学校区にあった自彊学舎の理事長（当時）吉村

松治氏を紹介して頂き、松山氏、吉村氏の他、宮内信正氏（現在、自彊学舎理事長。元校長）、東久雄氏、宮内博史氏（信正氏の弟）、税所篤央氏の計6名の方に同時にインタビューをさせて頂いた。

自彊学舎は稲盛氏の出身の西田小学校学区にある。平成20年（2008年）11月に舎創立130周年式典を実施した。自彊学舎の歴史は、『舎史（百年記念号）』（財団法人自彊学舎・昭和53年）によると、西南戦争の翌年の明治11年（1878年）に、西田清氏によって創始された「共同塾」と、同じ年に、佐々木弥九郎、和田亮一氏の発意によって誕生した「常盤学舎」に遡る事が出来る。西南戦争で鹿兒島の街は焼け、人々の心も荒廃した。学舎はそこからの立ち直りを求めて設立されたのだった。この両学舎は明治42年（1909年）に合併運動が進み、明治44年（1911年）に統合された。その時に、薬師町西田校西側の現在の位置に移り、「自彊学舎」と改称した。その後、「常盤学舎」という名の学舎が、常盤町の日枝神社の近くに、昭和6年（1931年）から昭和15～16年（1940～41年）くらいまで存在したがこれは、明治の学舎とは直接の関係はないという。昭和に存在した方の「常盤学舎」についての資料がないかも調べてみた。松山氏が自彊学舎の舎生であった徳留則夫氏に問い合わせたが、参考となる資料は残ってはいないという事であった。

本稿執筆の平成22年（2010年）で132年目を向かえる。舎の歴史の前半は戦争の時代であった。西南戦争で焼けた鹿兒島の復興を目指して設立された学舎であったが、第2次世界大戦の空襲で再び鹿兒島は焦土と化した。

証言から、稲盛氏自身は名簿に載っているような形では、自彊学舎の正式のメンバーとしては来てはいなかったのではないかと判明した。また、筆者は『舎史（百三十周年記念誌）一大西郷を偲びつつ』（財団法人自彊学舎・平成21年刊）でも確認したが、稲盛氏の名前は学舎出身者名簿には見つける事が出来なかった。

この事を自伝と照らし合わせてどう考えるかは、難しい部分だが、筆者がインタビューをした限りではそのような状況が判明した事を記しておく。だが、筆者に崎元氏と吉村氏を紹介して下さった松山氏の話では、稲盛氏がもし、舎におられたのが事実ならば、少しの間だけおられたのではないかと判明した事であった。筆者がインタビューをした崎元氏自身も1か月くらいしか自彊学舎にはおられなかったという。ちょうど空襲の頃だったという事もあるので、この時期に学舎に通った人については、それほどはっきりした記録が残っていないのか、この部分のみ記録が欠けているという事も全く考えられなくはない。だが、証言を総合すると正式な自彊学舎のメンバーではない子供も学舎に短い期間来ることもあったようだから、稲盛氏も短い時期、自彊学舎に通っていたのかもしれない。

または、本稿で記述するが、当時は小学校の放課後に学舎で行われるのとは別に県下の小学校で教師によっては、薩摩の郷中教育を非常に身近なものとして行っていたという事実もあったようだ。すると、稲盛氏は『あしたうらら』（西田一九会・穂高書店・2000年）には「学舎と呼ばれる施設」と書いているが、これは、自彊学舎ではなく、小学校か別の学舎で受けたものを指しているとの可能性も否定できない。西田小学校に行っていた稲盛氏が別の学舎に行っていた可能性はほぼ皆無なので、筆者自身は小学校ではなかったかという推論をしてもいるが、これも現段階では確実ではない。この事は最後にもう一度考察する。

稲盛氏の名前をはっきりと自彊学舎の名簿に見つけられなかった事は、筆者としては残

念なことではあるが、鹿児島 の 伝統に基づく当時の少年の教育が、稲盛氏の哲学に与えた影響を考察したい。

なお、本稿は全て筆者の行った自彊学舎関係者へのインタビューを元に構成している。本稿に記述する情報は基本的にこのインタビューによるものであり、一般的事項についてのみ一部、他の文献を参考にした事をここに断っておきたい。原資料として、インタビューの原稿そのものは後に掲げる。

2：鹿児島時代の稲盛和夫

稲盛氏の鹿児島時代の事績のうち、特に生まれてから高校までについて、本人の自伝である『ガキの自叙伝』（日経ビジネス文庫・2004年）から振り返っておきたい。稲盛氏は、昭和7年（1932年）1月、鹿児島市薬師町（現在の城西1丁目）に生まれた。父暎市、母キミの次男で後に二男、三女が出来た。昭和13年（1938年）の春に鹿児島市立西田小学校に入学する。卒業の近づいてきた昭和19年（1944年）稲盛氏は鹿児島第一中等学校（鹿児島一中）を受験するが失敗、尋常高等小学校高等科1年に入学した。その年の暮れ満州から叔父兼一が帰ってきたが、稲盛氏は叔父からシラミをもらい結核の初期症状である肺浸潤にかかった。その療養中に隣の婦人から借りた「生長の家」の設立者谷口雅春氏の『生命の實相』を初めて読んだ。この体験は稲盛氏にとって後々まで影響を与える大きなものであった。

次の昭和20年（1945年）には、鹿児島にも空襲警報が鳴った。この年、担任の土井教諭の勧めによって稲盛氏はもう一度、鹿児島一中を受験したが再び不本意な結果となった。しかし、土井教諭は諦めず私立鹿児島中等学校の受験手続を進めた。一中に二回失敗した事と療養中であった事から稲盛氏は消極的になっていたが、土井教諭の熱意に押し切られる形で受験し合格した。昭和20年（1945年）4月に稲盛氏は鹿児島中学に入学する。この年の8月には日本は終戦を迎えるがこの頃は空襲がはげしく勉強する雰囲気ではなかったという。B29爆撃機から焼夷弾が降ってくるという状況であり、この年の6月17日の大空襲では鹿児島市の大半が焼けた。この日は鹿児島では「市民の命日」と呼ばれており、稲盛氏の実家はこの日は消失を免れたが8月には消失した。

当時の状況について稲盛氏自身は、「高射砲が応戦することもなく、劣勢は明らかだった。私にとって終戦は焼い弾から解放されることだった」と述べている。⁽³⁾

昭和20年（1945年）8月に戦争が終わった時、稲盛氏は13歳であった。家が焼けた後、稲盛家は一家で郊外に疎開し、稲盛氏はそこから兄と2人で市内の学校に通った。昭和23年（1948年）には鹿児島中学を修了した。ちょうどこの頃は学制改革が行われ新制高校への移行期であった。父は働く事を勧めたが稲盛氏は高校進学を希望し卒業後は就職する事を条件に父親を押し切った。鹿児島中学、市立高等女学校、市立商業学校が統合して鹿児島市高等学校第三部となり、希望者はそのまま進学したという。二年後には稲盛氏は玉龍高校に転校し最初の卒業生となった。

玉龍高校時代、稲盛氏は野球に熱中するが父が内職で作った紙袋の行商を始めた。これが稲盛氏にとって初めての商業の経験となった。その後、稲盛氏は鹿児島大学工学部に進

学する事になる。

3：戦争時代の鹿兒島における精神教育

3-1：「郷中教育」と自彊学舎

郷中教育とは薩摩（鹿兒島）の伝統的な教育でその研究書も多い。薩摩藩では、古くから地域ごとに異年齢集団を形成し、青年の自治組織による修養教育が行われてきた。松本彦三郎氏の『郷中教育の研究—薩摩精神の真髓—』（尚古集成館・2007年復刊）によると、「郷中教育は藩政時代の数百年の久しきに亘り、薩摩藩島津氏の領内に、ことに主としてその城下に行われて来た青少年教育」である。⁽⁴⁾ 郷中教育は（今の市内部の辺りでは）地域単位の方限（ほうぎり）を基礎として行われ、その郷中は「咄相中」（はなしあいちゅう）から発したものであるという。「咄相中」はお互いに心の通じる仲間が一箇所に集まってお互いに語り合う仲間同士の事である。そこで話し合われるのはお互いの心身の修養に関してであった。仲間同士は自分の年齢に同じもの、近いもの、異なったものという風に形成された。そのグループ間にも長幼の序があった。

薩摩藩時代に行われていた前近代の「郷中教育」は、明治4年（1871年）廃藩置県と共に郷中制度がなくなると同時に廃止された。だが、明治10年（1877年）頃、旧郷中（地域）を基礎として学舎が起こる。西南戦争が終わった後である。本稿においては、明治維新後に近代国家になってから、明治10年（1877年）前後に起こった学舎によって行われてきた教育も広義の「郷中教育」という表現で記述していく。稲盛氏の著書の中に出て来る「郷中教育」も勿論この意味である。維新前の薩摩藩時代に行われていた歴史的な郷中教育と区別をせずにややこしくなり、本来的には、江戸時代までのものと区別する為、明治から戦前の鹿兒島で学舎を中心に行われていた教育を「郷中教育の流れを汲む精神修養教育」と書くべきなのかも知れないが「郷中教育」という表現で統一する。

さて、吉村氏（インタビュー当時：自彊学舎理事長）によると、郷中教育という言葉は数十年前から盛んに使われるようになったが、郷中教育がある頃はそういう言葉はなかったとの事であった。つまりは明治に江戸時代の旧地域ごとに学舎が復活して来た時もその当時の人々が、学舎で行われる話し合いによる精神教育を「郷中教育」と称していた訳ではないようである。郷中（ごじゅう）というのは、郷の中で行っているから「郷中教育」というのではなく、郷と中（じゅう）は別であるという。郷は「郷に入れば郷に従え」といういい方で使う「郷」の意味だが、中はその「中」という意味ではなく、重箱の「重」と同じ意味を持つという。また「咄相中」というのがどこの舎にもあったという。また郷中は方限を単位をしていたが、郷中という言葉がそのまま方限（町内の単位）を意味する言葉なのではない。中（じゅう）というのは、人の家庭の中に入るとすべてが見えるが、その中で子供の教育や進路などを話し合い良い方向に持って行く事だという。

郷中と方限は別のものである。そもそも「方限」は今の鹿兒島市内だけで使っていたものである。鹿兒島市内以外の県内（出水や知覧などの郡部）でも郷中教育は行われており、鹿兒島市内においては、方限単位で、この教育を実施していたが、これも郷中教育と言われていた。教員をしておられた宮内信正氏（現：自彊学舎理事長）によると、教員時代に

地方をまわっていて、鹿児島はセクトというか地域意識がかなり強かったという。宮内氏はその原因は、島津氏の教えにもあるのではないかといい、例えば、同じ西田方限でも西田と常盤、常盤と原良、西田と原良といったより小さな地域同志で石の投げ合いをした事もあるという。当時（昭和初期から戦前）は子供の時からそういう意識を植え付けられたようである。従って鹿児島にいる時は小さな地域で対立していてもある程度大きくなって別の場所に行くと鹿児島の間人は団結力が非常に強いという。これは過去の話ではなく、筆者（吉田）自身、現在でも実感として感じる事である。

『舎史（百三十周年記念誌）—大西郷を偲びつつ—』（財団法人自彊学舎・平成21年刊）には、学舎同士の喧嘩の事が書いてあるが学校同士の喧嘩が激しかった時代もあったようだ。この当時（戦前、戦中）に稲盛氏が自彊学舎に来ていたかどうかという一番の関心事について尋ねたが、先にも記したように、当時を知る東久雄氏の話ではどうも、稲盛氏は自彊学舎には来てはいなかったようである。

当時、稲盛氏は薬師町（現在の城西1丁目）の島津家の土地が区画整備された所で「島津どんの屋敷」と呼ばれていたところに住んでいたという。市内でも早くに区画整備がされたところであった。「島津どんの屋敷」は島津家が貸していたものではないかという事である。屋敷ではなく当時は「島津住宅」とも呼ばれていたらしい。昭和10年（1935年）頃には既に住宅はあつたらしく、郡部の方から引っ越してきた人が多かったという。稲盛氏の父親は小山田の出身だが、小山田の辺りは農業が多く、郡山に行くと少し士族がいたという。東氏によると自分たちの頃（昭和の戦前までか）は戸籍に士族と平民の区別がしてあったという。稲盛氏の自伝『ガキの自叙伝』（日経ビジネス文庫・2004年）にも父の畷市が印刷屋をされていた事は書かれている。⁵⁾ 父の畷市は小山田で生まれて、鹿児島市内に出て来て薬師町に住み、当初印刷屋に勤めた後、真面目な仕事ぶりが認められ、知人から印刷機械を譲り受け、自宅で独立開業した。

自彊学舎では、妙円寺詣り、曾我どんの傘焼きなどが特に重要な行事であった。証言によると、これらの行事の時は他の舎に負けぬように人を多く参加させたいらしい。舎は元々は士族の子弟の集まりだったが戦前に国民皆兵になってからは実際には士族も平民も区別はなかったという。舎としては行事の時には人を集めなくてはならないので、妙円寺詣りの時などは募集があつて、みな（舎に入っている子供は）友達を連れて行ったという。戦時中も妙円寺詣りは続いていた。昭和20年（1945年）は焼け野原になったので中止されたが、前年の昭和19年（1944年）には行われていたという。

自彊学舎の戦後の様子についても尋ねた。戦争の空襲で鹿児島市内も多くが焼失したが、その事によって、戦後は舎の活動も出来なくなったという。戦後の風潮の中では「舎」とはいうな、という時代であり、「学舎」が「児童塾」と言い換えられた時期もあったとの事である。GHQは神道指令なども出しているのに、日本の精神的な活動について、軍国主義と関連すると見なしたものは全て停止させたが、自彊学舎も何か指令を受けなかったのか疑問に思い、この点も尋ねた。これに関しては、6人の方へのインタビューでの見解では、特に何も指令はなかったはずだという事だった。軍閥に関係のある行事はやめるように指令されたが、妙円寺詣りなどはローカルなものでもあり引っかからなかったのだという。他の舎の事は分からないが、自彊学舎に関してのみいうと、占領期に活動は出来なかったのは、どこかから命令されたからではなくひとえに経済的な理由と社会の混乱によるもの

だったとの見方であった。妙円寺詣りに関しては昭和26年(1951年)には明らかに復活していた事などが分かった。舎自体の復興がなったのは、昭和29年(1954年)の事であった。

昭和初期の西田学区の子供についても尋ねた。東氏によると、全体の子供の数は西田小学校全体で2600人、一学年が約360人もいたという。そして一クラスは写真で数えてみると65人程であったという。単純に男女が約半数ずつとすると全学年で男子学生は1300人となるが、このうち自彊学舎に来ていた子供は10人くらい、比率でいうと0. 数%だという。つまり、小学校の中でも実際、正式に学舎のメンバーとなっていた子供はごく少数であったようだ。ちなみに東氏は稲盛氏の3年年上で、弟さんが稲盛氏と同じ年だったという。

また、東氏によると学舎でのみ「郷中教育」がなされていたのではなく、原良村自体が学舎と同じ教育をしていたという事だった。ここの部分が分かりにくいのでより詳しく質問をした。その答えによると、舎はまず、平日の放課後は3時頃からやっていたそうで、今日でいうと、ある意味では学童保育のようなものでもあったという。学舎に入っていないなくても、郷中教育を受けたのかという事について尋ねた。すると学舎以外にも学校で行うのも、町内で行うものもあったとの事であった。

とすると、何が郷中教育であるかは(人々が郷中教育という言葉を使う時)単に場所によって規定されるものではなく、その教育の中身、内容、スタイルによって規定されることも考えられる。但し、吉村氏によると、学校で行うのも町内会で行うのも同じく郷中教育ではあるが、舎は特別な場所であったらしい。年長者の言う事を聞かなかった時には、舎では(体を)打ったり、叩いたりされる事があり、舎は他とは違った濃縮した場所であったという。現在の学童保育とは似てはいるが非なる部分は精神性に重きが置かれていた事である。と考えると稲盛氏が「鹿兒島独特の郷中教育で鍛えられた面がある。」と書いており、かつ学舎の名簿には名前が発見できなかったといっても広義の郷中教育を受けていた事には変わりがないと考えられる。

東氏によると学校のものと学舎でのものには違いがあり、学校では戦争の為の軍国教育もやったという事であった。とすると、舎における郷中教育の方は、より精神的教育をするものの軍国教育とは一線を画していたのであろうか。精神教育をより重視する学舎が当時の世潮に全く影響されなかったとは考えにくいので、舎にも軍国主義的な考え方は教えられたのではないかと推察出来るが、小学校のように特別な軍事教練は舎ではなかったという事かも知れない。当時、学舎における教育では詮議が中心であったという。また積善会というものが1週間に1回あり、反省会のようなものが行われていたらしい。

吉村氏によると、要するに舎は平和な所で民主的な所であったという。ただ、徹底した話し合いをするところかとの筆者の質問に対しては、それは少し違うと答えられた上で、二十歳になるまでとなつてからは全く扱いが違つたと話された。子供は1つ年齢が違えば神様で縦の規律は非常に厳しいものがあつたようだ。だが二十歳を過ぎて長老(おせ)になれば皆対等となり、徹底して話し合いをしたという。途中で鹿兒島を出られた松山氏によると、自分はそこまでたどり着けず、ただ「議をいうな」で殴られた記憶ばかりだとの事であった。

ただ、税所氏の証言によると、舎には、50、60人といたが、誰も喧嘩はせず、喧嘩をしているのも見た事はないとの事であった。これは序列が決まっており、一緒に生活している兄弟のようなものだったからだ、という証言であった。ただ、縦の序列は年齢で決まっ

ているが、横（同年齢）の序列は喧嘩で決まり、それは、すぐに入れかわるという事だった。当時は特に転校生が喧嘩の対象になったらしい。喧嘩を好まない生徒も当時からいたとは思っているのだが、それはどうだったのか尋ねると、そういう生徒でも喧嘩の対象となったようである。この事は筆者自身、別の年配の方からも伺った。今では想像もつかないくらいに地域間（小学校間）でもよく喧嘩し、転校生は最初、必ずいじめの対象にもなったようである。

終戦間近の頃の学舎は活動も困難な状況であった。先にも少し触れたが空襲で鹿児島市街が焼けたが、舎屋も昭和20年（1945年）6月には焼けてしまった。建物が焼けたので学舎活動は出来なくなってしまったのである。戦後の自彊学舎は、陸士（陸軍士官学校）の学生だったが卒業前に戦争が終わり、戦争には行けなかった福永敬造氏という人が帰って来てから復興した。福永氏の他に海兵（海軍兵学校）の人が2人終戦で鹿児島に帰って来たという。これらの人が鹿児島に帰って来た時、鹿児島は焼け野原で大変であったが、彼らは戦前の教育を受けているので、どうかしないといけなと考へ、戦後の自彊学舎の復興が始まったという。

宮内（信正）氏によれば今の自彊学舎の原点はそこにあり、海兵と陸士で戦争に行けなかった人の怨念が入っているという。戦争に負けた怨念ではなく、行けなかった事の怨念というのは、個人的にどうかと思うが、筆者も当時の陸士や海兵の人がそう考えた事までは予想がつく。さて、確認したように稲盛氏は自彊学舎には通っていなかったようであるが、郷中教育は当時、学校でも町内会でも行われていたようである。稲盛氏が書かれている、「郷中教育」はどの時期、どの場所で受けられたかを確定するのは今後の課題であると言わざるを得ない。

さて、主に戦争中の鹿児島の様子について、証言を元に見て来たが、戦後の鹿児島についても質問した。先に見たように稲盛氏が終戦を迎えたのは13歳の時であった。戦後は鹿児島にも進駐軍が来た。連合軍は今の甲南高校（当時鹿児島二中）に常駐しており、そこが兵舎のようになっていたという。東氏によると、氏は当時すでに旧制中学を卒業しておられたが、仕事はなく焼け跡の整理をしていたという。占領軍（米軍）からの要請で町内会の隣組から何人か人を出さなければならないという事になって、アメリカ軍のいるところの掃除をしたり、武岡から砲弾を海に捨てに行くなどの仕事に駆り出されという。主に17、8歳の若者が引っ張り出されたという。稲盛氏は当時、まだ13歳だったからこのような仕事はしておられないはずである。

当時は二中に軍令部というものがあり、軍政部は市役所内におかれていたとの事であった。当時、県庁は終戦直前の6月17日の大空襲で焼けてなくなっていた。県庁は一時、市外に移っていた時代があり、鹿児島大学の前身である七高（第七高等学校）も出水に移った事があるとの事であった。戦時中は学校でも男女別々で、兄妹でも一緒に歩けば叱られるという事だったが戦後は徐々にそのような気風も変化して行ったようである。

3-2：戦時中の教育と稲盛和夫の少年期

次に、6人の方へのインタビューと重なる部分を省いて、先に行った崎元氏へのインタビューから判明した事について記しておく。特に崎元氏からは戦時中の学校での教育について証言を得た。それと共に稲盛氏の子供時代についても証言を得たので記しておく。西田

小学校は当時、マンモス校だったのは上述した通りである。1学年の人数は360人で、学校は共学だがクラスは男女別だったという。男子3クラス、女子3クラス。1クラスは60人くらいだったという。学校全体では2600人くらいいたのは、先に記したが、当時は皇紀2600年頃でそれと同じ人数といていたという。

崎元氏の証言によると、稲盛氏の体格は中くらいだったという。稲盛氏は、相撲選手には入ってなかったらしい。当時から西田小学校は文教地区にあり、もぐりで来ている人も多かったという。それらの人々は田舎から来ていたとの事である。県下から集まり、出水や曾於郡などから来る人がいたらしい。その理由は、県下の人は皆、県立一中（現在の鶴丸高校）を目指していたからだという事だった。崎元氏によれば、稲盛氏は相撲の選手とか、足が速いとか学業の方でも目立つ方ではなかったという。また稲盛氏が『あしたうらら』（穂高書店・2000年）に書いている事と関係あるようだが、当時、稲盛氏は担任に睨まれていたのではないかとの事であった。この本の中には、稲盛氏の「生い立ちと両親」という文章があり、その中に「えこひいきに反発」、「父は正義を理解してくれる」というパラグラフがある。⁽⁶⁾ そこには6年生の時の担任教師との確執について書かれている。後年になって稲盛氏がかなり詳細にその事を振り返って書いている所をみると、相当、6年生の時の担任とは相性が悪かったのであろう。今となつては良い思い出だという筆致ではなく、読んでみると今でも稲盛氏はこの時の担任を快く思っていない事が伝わってくる。

稲盛氏が小学校卒業後、鹿児島中学へ進んだ事は先にみた通りだが、この年に明治から戦前の学校制度が解体した。そして学制改革が行われたが、鹿児島中学に行った人が、改革によって（旧）一中や二中に分散し、この時、稲盛氏は新製の玉龍高校に行く。同学年よりは1学年下になっていた。

今の時点からは想像がつかない事であるが、学制改革の時代は、少数ではあるが、旧制中学と新製の両方を卒業している人もいるとの事であった。また、旧制で小学校卒業後、旧制中学に行った人が皆、新制高校に行ったわけではないとの事が証言から分かった。これは単に編入試験があったからという事ではないという。家庭の事情などから旧制中学に進んだ人の中にも新制高校への進学を断念された方がおられたのだろう。

崎元氏も稲盛氏は自彊学舎には行っておられなかったようだ、との証言をされた。但し、名簿にはないが、1、2ヶ月行かれていた可能性はあるとも付け加えられた。何と云っても当時は、空襲があった頃でもあり大変な時代だったのである。崎元氏の話でも、今日という「郷中教育」の伝統は小学校でもやっており、学舎のあるところだけでやっていたのではないとの事であった。

当時、小学校で示現流の稽古は義務付けられていたとの事であった。崎元氏の証言では、小学校に行けば、太刀打ちをまず、10から15分やってから教室に入ったという。示現流について稲盛氏は、自伝『ガキの自叙伝』（日経ビジネス文庫・2004年）の中で「…弱虫がまともに育ったのは鹿児島独特の郷中教育で鍛えられた面がある。…薩摩藩に伝わる示現流の稽古もあった。」⁽⁷⁾ と述べている。稲盛氏が子供時代に示現流を習っていた事は間違いないが、それはどのようなものだったのだろうか。今日、「じげんりゅう」と呼ばれるものには、東郷流と薬丸流がある。そしてこの両者はかなり違った流派であるが実際に鹿児島以外ではかなり混同されているようでもある。

薬丸流は（幕末の）郷中教育に取り入れられたと言われている。その為に、幕末期に下

級武士に飛躍的に広まり、その教育を受けた門弟の中から維新の元勳が多く出た事もあり、「明治維新は薬丸流が叩き上げた」とも言われている。幕末の京都で新撰組が畏れたのもこの薬丸流の方である。崎元氏によると、どちらを習うかは学校によって違い、西田小学校は東郷流だったという。この事から、稲盛氏が自彊学舎ではなく西田小学校で稽古をしていたとすると、薬丸流ではなく、東郷流示現流を習っていたと考えるのが自然である。

6人の方へのインタビューの中でもこの示現流については質問したが、吉村氏によると自彊学舎では、自身が通われていた当時は薬丸（自顕流）を教えていたという。松山氏の証言によると、昭和15年（1940年）までは薬丸流、その後、昭和16年（1941年）から昭和56年（1981年）は東郷示現流に変わり、最近では薬丸流に戻っているという。稲盛氏の著書には「…薩摩藩に伝わる示現流の稽古」⁽⁸⁾とあり、本人が「示現流」との記述をされている以上、東郷流を習っていたと解釈するのが自然ではあるが、学舎が薬丸流だった事から、短期間だけ薬丸流を習った可能性も完全には否定出来ない事も併せて記述しておく。

（東郷）示現流は、古くから伝わった方の示現流であり、幕末に下級武士を中心に流行した方の（薬丸）自顕流とは別である。しかし、巷間「示現流＝一撃必殺」というイメージがある為か、両者を混同した記述もしばしばものの本には見られるようである。「薬丸流（自顕流）」も「（東郷）示現流」も「一の太刀を疑わず」「二の太刀要らず」といい、先手必勝の鋭い攻撃が特徴であるとされる。稽古での違いは、示現流が立木に向かって激しく左右に攻撃するのに対し、薬丸自顕流は、横木を反復して打つ練習をする。

前節でも確認した事と重複するが、崎元氏の話でも、当時は、県下の小学校で「郷中教育」を行っており、ある学舎でのみやっているというものではなかったという証言を得た。その中に剣術もあったという。筆者が行った2回のインタビューの証言からだと稲盛氏がどの場所で郷中教育を受け、示現流の練習をしたかは確定出来ないが、学校でも示現流の稽古は行われていたので、学校で稽古された可能性が高いのではないだろうか。

崎元氏は、当時の郷中教育については、元々、薩摩の気風の中で続いてきたものではあったが、戦争という時代特有の影響もあったといわれた。薩摩・鹿児島は西南戦争以来、ずっと戦争が続いて来たという感じがあるとの事だった。元々、薩摩の気風というものがあり、近代の西南戦争以来ずっと戦争が続いており、更に第2次大戦となり、郷中教育にも当時の国策にあった子どもを育てるといふ部分は当然あったのではないかとの見解だった。

長い歴史の中で、島津公に忠誠を誓うという部分を、戦争の時期は、国家（天皇陛下）に置き換えるとそのまま、戦中の教育に合うので、戦争に利用されたという側面はあるとの指摘であった。これはおそらく大部分、正しい見方であろうと思う。また、崎元氏は、元々、郷中教育は武士団養成の為の教育だから、戦時中の教育とは合致したのではないかとの見方も示された。先に見た6人へのインタビューと見解が違ったのは、それ故に、郷中教育は終戦後にはGHQから目を付けられたとの見方をされている所だった。先に記したように6人の方は、妙円寺詣りが、戦後6年目の昭和26年に復活している事などから、必ずしもGHQはそこまでは見てなかったという見解である。GHQが実際の所、どの程度、郷中教育を危険視したか、または取り締まろうとしたのか、見逃されたのかは現段階では不明である。だが、戦後は混乱期で経済的理由もあったので、学舎活動がすぐには復興できなかったのは事実であった。

戦後のGHQがどう判断したかを別にしても、戦前の郷中教育が、第2次世界大戦とは切

っても切り離せないとの認識は、普通に考えてもそう偏ったものではなく実態に近いものであろう。郷中教育の場を利用して軍国主義的な価値観を刷りこまれて行った事は想像に難くない。但し、これは日本全国が（今日の言葉でいう）軍国主義の時代だったので、鹿児島が特別に好戦的な教育をした訳ではないと考えられる。

当時の子供の生活は、全て戦時体制に合わされており、女性の服装はモンペだった。学校で軍事教練があり、徴兵を受ける前の子供を訓練したという。鉄砲の打ち方などの訓練があったそうである。また、当時は教員であって職業軍人の人が学校にいた。教員で徴兵された人が学校に戻って来たのではなく、職業軍人で戦地から帰ってきて、教員になった人たちがいて、それらの人が学校に配属されていたのである。崎元氏の回想によれば、当時の中学生は軍事教練一点張りであり、軍事教官という人がおり、彼らは軍人上がりで、位は少尉や大尉の人もいたとの事であった。軍事教練は中学以上、小学生はやらなかったという。崎元氏が軍事教練を受けているので、同級生であった稲盛氏も訓練を受けたと思われる。

また、当時は（旧制）中学校に進学出来なかった人も多かったが、これらの人にも軍事教練はあり、1週間に1、2回だったとの事であった。戦争中に疎開がなかったのかも質問したが、鹿児島には疎開（他県に見られるような強制疎開）はなく、帰農があったとの事であった。崎元氏ご自身は、2週間くらい行かれたそうだが、稲盛氏が帰農したかどうかは分からないとの事であった。帰農には食糧増産の為という意味合いが強く、疎開のような避難という意味合いは少なかったという。帰農の時期は農繁期で、6月や秋の刈り入れの頃だったとの事だった。

ただ、空襲と疎開については、別の証言もあるので紹介しておきたい。6人の方々へのインタビューの中での吉村氏の証言によると、強制ではなくとも自主的に疎開しなければならぬ雰囲気があったとの事だった。吉村氏は実際に郡山に疎開され、そこに行く前には家の近くの防空壕で4日くらい生活をされたとの事であった。6月17日の大空襲で現実さらされ、焼け残った人々も昼間は家に帰っても夜は家で寝ず、300、400メートル離れた山の中に小屋を作ってそこで寝るという事もあったようである。街の人も常盤の方では防空壕を掘っていたという証言も得た。いかに昭和20年（1945年）の4月と6月の空襲が大きなものであったのかが伺える。大空襲までは疎開はなく、主に帰農であったが、終戦間近の昭和20年の空襲後くらいから鹿児島でも疎開をする、もしくは夜は別のところで寝るといふ事が行われるようになってきたのであろうか。

稲盛氏は、著書において自らを「ガキ大将」だったと回想しているが⁽⁹⁾、崎元氏の回想では、中ぐらゐのガキ大将だったらしい。ガキ大将にも率いている子分によっていろいろあったとの事であった。

結局、筆者のインタビューでは稲盛氏が自彊学舎に長く通ったという事実は確かめられなかった。むしろ複数の証言から稲盛氏は正式には自彊学舎の舎生ではなかった事が確認された。これはこれである意味では成果なのかも知れない。しかし、上述したように『あしたうらら』（西田一九会・穂高書店・2000年）にはかなりはっきりと「私も小さい頃に、学舎と呼ばれる施設で、その教育を受けた事を覚えている。」と述べられている以上、どうしても不可解な感じが残るのは否めない。「学舎」という言葉がある以上、自彊学舎に全く行っていなかったとは考えられない。

だが、名簿には名前はなく、証言からも長く継続しては来ていなかったという事の方が有力である。『舎史（百三十周年記念誌）一大西郷を偲びつつ一』（財団法人自彊学舎・平成21年）に出ている名簿はかなり正確なもので、県外在住者、鹿児島県関係に分けて書いてあり、更に鹿児島県関係は年代別に書かれている。稲盛氏は現在78歳（当時76歳）であるが、この名簿の70歳代のところには、25人の人々の名前があるのみである。ちなみに、この本の100ページには、平成17年（2005年）12月8日に行われた「自彊学舎秘蔵品展」が行われた時に展示物を見る稲盛氏の写真が載っている。

筆者の推論では可能性は三つある。一つは短期間のみ稲盛氏は自彊学舎に行っており、正式な舎生でもあったが、空襲の時期とも重なり、正式な記録が残っていない事、もう一つは正式な舎生ではないが、大きな行事などがある時に友人に誘われて行っていたというものである。また、もう一つは、昭和6年（1931年）に出来た常盤学舎の方に行っていたのではないかとこのものである。

『舎史（百三十周年記念誌）一大西郷を偲びつつ一』（財団法人自彊学舎・平成21年）に「常盤学舎」の昭和12年（1937年）の写真が載っている事から、筆者はこの可能性も高いのではないかと考えた。だが、上述した松山氏が徳留氏に聞いて下さった証言によると、常盤学舎に稲盛氏らしき人は通っていない事であった。また、当時の常識から考えて稲盛氏が住んでいた薬師町（現在の城西1丁目）から自彊学舎のある場所を超えて常盤町に行くという事はあり得ないという事であった。また常盤学舎は規模が小さく、日常的な活動はそれほど活発ではなく、妙円寺詣りなどの特別な行事のみを行っていたようであった。従ってこの三つ目の可能性は皆無に近いと考えられる。

これらを総合すると、妙円寺詣りや曾我どんの傘焼きなどの重要な行事がある時には、他の学舎に対抗する為に多くの人を集めたという証言から、正式な学舎の舎生ではなくともしばしば、学舎での行事に参加していた事などを含めて稲盛氏が「学舎と呼ばれる施設で、その教育を受けた事を覚えている。」という表現で書いておられるとも考えられる。

また、宮内（信正）氏の証言では、自彊学舎に来ていたのは10人かそこら、との事であったが、税所氏の証言では、舎には50人、60人いたが、誰かが喧嘩をしたのを見た事はないというものがあつた。10人と50人とではかなりの差だが、これは正式な舎生で長期参加していた人は10人程で、何らかの形で時々参加していた人を全部たすと50人から60人くらいにはなつたという事なのであろうか。そして稲盛氏はその50人か60人くらいの中に入っていたという事なのであろうか。証言を総合するとこのように推論する他はないのである。

4：結びにかえて—薩摩・鹿児島 の 気風と稲盛和夫—

周知のように稲盛氏は薩摩・鹿児島 の 先人やそれらの人々を育んだ精神文化から多大な影響を受け、企業経営を始め諸々の社会的活動に活かして来た。薩摩・鹿児島 の 精神文化と稲盛思想、または、その経営哲学とはどのように関係があるのだろうか。今回のインタビューで稲盛氏が自伝の中で、郷中教育や示現流の事について書いている事について、宮内（信正）氏は、「その中で培われたものがあるという事だと思ふ、不遇な時に、もうダメだと思つて落伍するか立ち上がるか、人の価値はそこにあると思ふ」と述べられた。

稲盛氏が（特に若い時期）必ずしも順風満帆とは行かず、不運の中でもそれに負けずに実業家としての成功をおさめた背景には薩摩の郷中教育で育まれた精神を持っていたからだという見解であった。これは全面的に筆者も賛同するものである。稲盛氏の思想全般、フィロソフィーはもっと多くの思想や宗教などから構築されており、様々なものが融合されて独自の経営哲学に昇華されたが、その最も基本的な部分、純粋な核の部分に薩摩・鹿兒島の精神が脈々と生きていく事は間違いがないところであろう。

稲盛氏が西郷南洲（隆盛）を最も尊敬し、その座右の銘であった「敬天愛人」を自らの座右の銘にし、京セラの社是にもしている事は広く知られている事実である。だが、一方、稲盛氏は大久保利通についても評価をしている。本稿で度々触れた『あしたうらら』（西田一九会・穂高書店・2000年）の中に稲盛氏は「西郷と大久保」という一文を寄せている。⁽¹⁰⁾ その中で、稲盛氏は自身が西郷から受けた影響について述べ、特に『西郷南洲翁遺訓』を自身が会社経営をする上での指針にして来た事などを述べている。そして、後の方に、「大久保利通に学ぶ」というパラグラフがあり、「明治維新から130年経った今でも大久保は鹿兒島県人の敬愛を得る事は出来ない」とした上で、大久保の新国家建設の為に施策を検討し立案して行く論理性や、様々な条件を現実にも即して調整し、実行に移して行く卓越した実務能力を評価している。そして、自身の人生を振り返っても思いあたる事がある、として会社をつくるまでは、西郷隆盛の生き方や考え方に傾倒していたが、会社をつくって自分で経営しはじめると西郷のような考えだけでは行かない事に気づいたと述べている。そして、稲盛氏は「明治維新のとき、たまたま私の故郷から考え方も性格もまったく違う西郷と大久保という二人の偉人が生まれた。私は、同郷人として親しみを覚えながら、彼ら二人から人生においても、事業を行う上においても、多くの大切なことを学んできたように思う。」⁽¹¹⁾ とこの文章を結んでいる。

現在、戦後日本を代表する最後の大物起業家経営者として成功をおさめ、更に平成22年（2010年）からは日本航空のCEOとして経営再建を手掛ける稲盛氏は、西郷を敬愛しているにも関わらず、ある意味においては、（鹿兒島の人からは）外に行って戻って来ない大久保のようにも見られている事も分かった。確かにそういう解釈も完全な間違いではなからう。だが、西郷も大久保も二人とも一生き方や考え方、性格は違ったが共に薩摩・鹿兒島の土壌から生まれた事は共通である。鹿兒島で生まれ育ち、戦後の日本社会でベンチャー企業を起し、その小さな企業を世界的規模に発展させた稲盛氏の精神の根底に薩摩的なものが核となっている事は間違いがないであろう。

本稿が企業家稲盛氏の少年時代の背景と当時の世相・教育について、そしてそこから氏が受けた良い意味での影響－戦争期の軍国主義的風潮とは直接関係なく、より普遍的な意味での影響－について、いささかでも新しい知見を発見出来ていれば幸いである。

※ 本稿は、存命中の方へのインタビューを元に構成したので全ての方に本文中に敬称をつけた。また、稲盛氏についてのみを敬称略で記すもののバランスが悪いので本稿においては敬称を付けて記した。

【註】

- (1) 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（日経ビジネス文庫・2004年）pp. 25-26
- (2) 西田一九会『あしたうらら』（穂高書店・2000年）p. 233
- (3) 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（日経ビジネス文庫・2004年）p. 35
- (4) 松本彦三郎『郷中教育の研究—薩摩精神の真髓—』（尚古集成館・2007年）p. 15
- (5) 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（日経ビジネス文庫・2004年）p. 19
- (6) 西田一九会『あしたうらら』（穂高書店・2000年）pp. 23-27
- (7) 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（日経ビジネス文庫・2004年）pp. 25-26
- (8) 前掲書 p. 26
- (9) 前掲書 pp. 24-29など。他にも多くの記述あり。
- (10) 西田一九会『あしたうらら』（穂高書店・2000年）pp. 233-244
- (11) 前掲書 p. 244

【参考文献】

稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』日経ビジネス文庫・2004年
西田一九会『あしたうらら』穂高書店・2000年
財団法人自彊学舎『舎史（百年記念号）』昭和53年
財団法人自彊学舎『舎史（百三十周年記念誌）—大西郷を偲びつつ—』平成21年
松本彦三郎『郷中教育の研究—薩摩精神の真髓—』尚古集成館・2007年復刊
鹿児島県立図書館刊行『薩摩の郷中教育』昭和47年

【資料】

自彊学舎綱領

- 一． 忠孝を経とし仁義を緯として織なせる日本人としての信念に生くべし
- 一． 文武を励み気節を尚び廉恥を重んじ反省自彊不息すべし
- 一． 質実にして不撓不屈事にあたって断じて退く事なかるべし
- 一． 和してなれず交わりて長幼の序あり、挺身犠牲団結その熱に燃ゆるべし
- 一． 人におくれをとらず弱気を扶け口に虚言を吐かず行は常に正をふむべし

【謝辞】

本稿の元となった、インタビューを行うに当たって、多くの方からご協力を頂いた。自彊学舎常務理事の松山道氏には、稲盛名誉会長の小学校時代の同窓生で元中学校教諭崎元吉博氏と自彊学舎理事長（当時）吉村松治氏をご紹介して頂いた。また、更に吉村氏の関連で多くの方にお声掛けを頂きインタビューに応じて頂いた。貴重な時間を割いてインタビューに応じて頂いた皆様にこの場をお借りして心から感謝の意を表します。また本稿の記述内容に著しい誤りがないか、脱稿後、崎元氏、松山道氏と自彊学舎関係の複数の方にお目通しを頂いて内容を確かめて頂いた。記して感謝致します。原資料としてインタビューの原稿そのものを後に掲げておきます。



自彊学舎の全景



自彊学舎看板



自彊学舎の門柱

※いずれも筆者撮影

●インタビュー 1

崎元吉博氏インタビュー

【日時】平成22年3月16日 午後1時～2時半

【場所】自彊学舎

【聞き手】吉田健一（鹿児島大学稲盛アカデミー特任講師）

【インタビュー対象者】崎元吉博氏（稲盛名誉会長と小学校4年が同クラス。元中学教師。）

【同席者】松山道氏（自彊学舎理事。崎元氏を紹介して頂く。）

崎元：稲盛和夫とは、和夫君といますが、西田一九会という同窓会で同じです。これが連綿と続いています。

吉田：崎元先生は稲盛さんと同じ学年ですか？

崎元：小学校4年生の時が同じです。人数が360名。共学ではありませんでした。男子3クラス、女子3クラスで、共学ではありませんでした。そう言った中で、彼との面識は記憶に残っているのは、子どもの時の記憶ですよ、四年生の時です。彼は（体の大きさが）中くらいですね。まあ、あまり、目立つ方ではなかった。遊び相手でもなかったし、記憶に残っているのは、5、6人の部下、下々をつれていたという感じなんです。竹の筐、切ったばかりの筐をもって歩いていました。5、6人従えて歩いていたのを覚えています。

吉田：ご本人が自伝『ガキの自叙伝』に書かれているのでは、学校に入られるまでは泣き虫で…小学校に入ってからガキ大将になったと書かれています。

崎元：（『あしたうらら』を渡してもらう）『あしたうらら』というのは私が作ったのです。記憶と言うと4年生ですね

吉田：小学校に入ってからガキ大将になった…。

崎元：そうでもないですね。相撲選手にもなっていないですから。自分は選手に入りましたが、6年1組でしたが、69人いました。自分はその中で10人に入りましたが、稲盛さんはその選手に入らなかったですから。体は大きくなくても巧みであれば選手に入りますから。普通ではなかったですかね。相撲とかは。級長を勤めるという感じでもなかったです。普通を感じてましたね。これには正しく書いてあります。

吉田：相当ですね。全学年で何人くらいですか？

崎元：全学年で360人。女子、3クラス男子3クラス。1クラス60人くらいですね。

吉田：1学年が360人。学校全体では、どのくらいおられましたか？

崎元：2600人くらいですね。当時、皇紀2600年でしたが、それと同じ人数がいました。マンモス校ですね。

松山：私の頃も1学年、7クラスありましたね。当時から西田小学校は大きかったです。文教地区ですから人は集まって来ました。

崎元：もぐりの人もいました。

吉田：どこから来るのですか？

崎元：田舎からですね。

吉田：自分が行っている学校には行かないのですか？

崎元：はい。

松山：県下の方は皆、鶴丸高校を目指していましたからね。ここは西田小学校、城西中学校、鶴丸高校と全部揃った、良い学区なので、出水、曾於郡など田舎から来ていました。特に私の頃は城西は体育がすごくて、県下から集まって来ていましたね。このように学校が全地区集まっていたので、田舎からもぐりで来ている人もいました。

吉田：この間、お借りした『舎史』を読んでいたのですが…。

崎元：同窓会の事ですが、(稲盛さんは)相撲の選手とか、足が速いとか、勉強の方でも目立つ方ではなかったです。今は体が大きいですが、当時は小さかったです。5年生、6年生の時の事は本人が書いていましたが。(『あしたうらら』の事)これをまとめるのは大変でした。「あしたうらら」というのは校歌の最初の歌い始めです。

吉田：当時のお写真でした。

松山：稲盛さんご自身も寄稿されているんですね。

崎元：はい。

吉田：書いてありますね。「西郷と大久保」。

崎元：小学生の事が多く書いてあります。

松山：そうすると、同級生の方のお名前も結構分かりますね。

崎元：分かります。

吉田：2000年というと10年前ですね。

崎元：女子の方もまとめてあります。

松山：これから紐とけば、いろいろな人に会えますね。

崎元：彼は担任の先生に睨まれて…。鹿児島中学校(鹿中)に行きましたが。学校制度が解体しましてね…。学制改革で鹿児島中学に行った連中がそれぞれ、一中や二中に分散しまして。稲盛さんは今の玉龍高校に行きました。

松山：先生の方が一年上で。

吉田：それは自伝に書いてあったかも知れませんね。学制改革のところは複雑ですね。中学の恩師がたまたま、玉龍高校の恩師として来られたという…。

崎元：6・3・3・4制になりましたからね。私は(中学)4年生の時に学制改革にあって5年生になった時に玉龍高校の2年生になりました。卒業証書は旧制と新制の両方を卒業しています。

吉田：旧制と新制と両方卒業されている人は少ないですよ。

崎元：少ないですね。

松山：複雑ですね。その辺は。

吉田：旧制中学に行っていた人が皆、新制高校に行かれた訳ではないのですね。

松山：編入試験か何かあったのですか？

崎元：いや、試験はなく、そのまますべるという事でしたが。

吉田：郷中教育についてですが、この間頂いた(自彊学舎の)名簿には稲盛さんの名前はないようですが？

松山：(崎元)先生は？

崎元：私は1カ月くらいですね。相撲を取ったり、太平記の話を聞いたり。

吉田：稲盛さんが自彊学者に来ていたかどうかは？

松山：今、先輩方にお聞きすると、自彊学者には来ておられないのではないかと。少しおられたのかも知れませんが…。

崎元：私の頃は空襲がありましたから。そういった変遷もありますから。

吉田：鹿児島大空襲の時の様子も、お聞きしたかったのですが…。自彊学者の名簿にはなくても自伝の中で郷中教育に影響を受けたと書かれていますか…。

松山：小学校でやっていました。

吉田：学舎には来ていない子どもがどういう風に郷中教育から影響を受けたのですか？

崎元：軍国主義一点張りで、示現流など…。

吉田：示現流の事も本人が書かれていますか？

崎元：義務づけられていましたから…。

吉田：『ガキの自叙伝』にも示現流の事を書かれていましたが。自彊学舎でやっていたばかりではなかったのですか？

松山：その頃、郷中教育というのは特別な学舎でやっていたというだけでなく、県下小学校で薩摩の郷中教育は非常に身近なものとしてやられていたという感じですね。

崎元：年齢差のある子どもが縦の学年、縦の系統では絶対年上には逆らえないというものでした。

吉田：それは元々の薩摩・鹿児島の気風というものの影響か、先生が今いわれた時代的な影響と両方関係がありますか？

松山：西南戦争以来ずっと戦争が続いていましたから。もっというとは島津が入って来た時からずっとです。

吉田：第2次世界大戦中だったので、国策にあった子どもを育てるという部分もやはりありましたか？

崎元：ありました。他の県でもあったかも知れませんが、鹿児島は特に強かったと思えますね。

松山：島津公に忠誠を尽くすのを日頃からやるというのを、これを国家に置き換えるとまさに戦中の教育と合うのですから。戦争に利用されたという側面もありますね。

崎元：元々、武士団の養成の教育ですからね。質実剛健で…。肝試しなどもやりました。戦時中はその色が濃かったですね。だから戦後、GHQに目を付けられました。自彊学舎も再建になったのは、昭和29年です。

吉田：GHQが制度改革をした後は、日本の精神を変える為に神道指令を出した事などは、私も知っていましたが、郷中教育も睨まれたのですか？

松山：まさにそうですね。

吉田：この日本の南の端の薩摩の郷中教育も見つけられたという事ですか？

崎元：そうですね。ようやく社会が落ち着いてから、活動が出来るようになって行きました。第2次世界大戦との関係はどうしても切っても切り離せません。

吉田：当時の西田学区の子どもの生活というのは？

崎元：軍国主義ですよ。教師もみな、丸坊主。記憶では一人だけ長髪の先生もいましたが…。服装は女の方はモンペ。軍事教練がありました。普通この頃の少年は小学校を徴兵検査で徴兵されるまで子どもを一か所に呼んで、4年生の時の担任が教員であ

りながら軍人で少尉の方でした。

吉田：教員であって職業軍人の方ですか？

崎元：職業軍人の方です。徴兵を受けるまでの子どもを訓練します。鉄砲の打ち方とか。

崎元：中学では軍事教練一点張りですからね。軍事教官というのがいました。軍人上がり、少尉の方も大尉もいました。軍事教練という科目がありました。

吉田：対象となった子どもは？

崎元：中学生全部です。

吉田：小学生はやらないのですね？

崎元：小学生はやりません。中学1年か2年です。

松山：軍人が、ちゃんとした小学校の教員の資格をもって教えておられた。正式のものとは別個に入隊までの青年に教えておられたという事ですね。

崎元：中学校に行けない人が多かったですから、そういう人を対象に1週間に1回、2回やっていました。私の担任が少尉でしたが、軍服を忘れた時など、その先生の家で軍服や指揮刀を走って取りに行きました。青年に対する軍事教練を週何回かやっておりました。

吉田：示現流はその時はしませんでしたか？軍事教練の内容は近代的というとおかしいですが、そういうものだけだったのでしょうか…。

崎元：示現流は学校で義務付けられていました。小学校に行けば、まず太刀打ちを10分か15分やって始業の合図で教室に入って行きました。

松山：私らもやりましたよ。今は横木ですが、示現流は…

崎元：あれは（横木の流派の事）東郷流ですね。

吉田：示現流もいくつか流派があると聞いていますが…。

崎元：東郷流と薬丸流ですね。

吉田：教える先生によって違うのですか？

崎元：学校によってですね。

吉田：有名な一撃必殺は東郷流ですか？

崎元：一撃必殺は薬丸流です。それはこわいです。

吉田：東郷流か薬丸流かは先生によって決まるのですか？

崎元：学校によってですね。

吉田：西田小学校はどちらでしたか？

崎元：東郷流ですね。

吉田：戦争中、鹿児島も空襲を受けたというのを聞きして、稲盛さんも市民の命日と呼ばれる日について書いておられますが…。

崎元：一番大きかったのは、昭和20年6月17日、終戦の2ヶ月前ですね。私はその時、帰農といって垂水に行っていましたが、帰ろうとしたら空が赤々と燃えあがっていました。

吉田：夜ですか？

崎元：はい。勿論、夜です。照明弾というのを途中で落として、それをばらまかれています。それが落ちて同時に落ちて、油に点火して、当時は木造家屋ですから7割が焼かれたそうですね。そういった事もありましたね…。

吉田：7割焼けた6月17日…。

崎元：その前にもですね…。沖縄はおちて…。空襲警報はよくありました。

吉田：空襲は大変なん事だと思いますが、戦争に対する疑問のようなものはなかったのですか？

崎元：勝つと思っていました。先生も勝つと思って教えていました。

松山：やはり、勝つと思っておられましたか？

崎元：文永の役、弘安の役でも神風が吹いたので、日本は絶対勝つと教えられていました。

松山：外敵はその時以来ですものね。みんなですう教えられるとそうってしまうものなのですかね…。

吉田：私も伯父からそういう話は聞きましたが…。戦後、出征兵士で送った先生がピタッと変わって共産党になられた話も聞きましたが。先生も信じていたのですね。子どもを騙してという意識はなかったのですか…。疎開というのはどうでしたか？

崎元：疎開は鹿児島にはありませんでした。帰農だけです。…農業をやりました。でも飯だけはたらふく食べられるのでましでした。

吉田：大体、2週間というのは決まっていたのですか？

崎元：大体、そうですね。勉強もしないといけませんから。

吉田：食糧増産が目的だったのでしょうか？

崎元：食料増産のためというのが大きかったですね。

吉田：田舎の方が空襲を受けにくいので避難したという側面はなかったのですか？

崎元：あったかも知れませんが、鹿児島には強制疎開はなかったです。

吉田：2週間というのは入れ替わり行くのですか？

崎元：そうではありません。農繁期です。麦が6月、稲刈りは秋にという風にです。

吉田：当時、戦争中はこちらの自彊学舎の活動は？

崎元：私は1ヶ月か2ヶ月でしたから。その時、旧制中学生が来ていました。暴れん坊が。

吉田：『舎史』を読んでおられますもそういう思い出を書いておられる人もおられますね。先ほどの話に戻りますが、自彊学舎に来ていなかった子どもの受けていた郷中教育は幕末維新の頃と同じような内容が生きていたのですか？「負けるな、嘘をつくな、弱いものをいじめるな」…。

崎元：ええ。

吉田：稲盛さんは思い入れをもって書かれています、この年代に鹿児島で郷中教育を受けてその後、…。

崎元：鹿児島独自のものですね…。

松山：だけど、鹿児島から出るとなかなかですよ。確かに鹿児島では、「負けるな、弱いものをいじめるな、嘘をつくな」これを本当にやって行くというのはなまじっかな事ではないですよ。鹿児島から出て行くと本当に異文化というか、どうやって人を押しのけて、表面上はどうやって融和してやって行くかというのに皆が精力をそそいでやっているのですよ。うちは先輩には申し訳ないけど、封印していましたよ。鹿児島の方が歴史上出て来て活躍するのは昔は古代の何とか姫と、明治維新の時ですね。未だに鹿児島は独自性が強いですよ。

崎元：徹底してやりましたな。

松山：中央のといふとなかなかうちとけない。そういう付和雷同的な事をするのが嫌いな人といふか、迎合しない人は外から見れば頑固者ですよ。九大か何かいっててもかなりの人が帰っているのです。鹿児島に。

崎元：九大ですか？

松山：私は東大ですが、九大か何か、勿体ないといふか、もっと中央で活躍すればいいのに鹿児島に帰ってきている人が多いといふか…。だから郷中教育は私は確かに非常に良いのだけど、鹿児島の人には理解出来るといふか、頭ではなく体に染みついているのですが、なかなか全人格教育がどうのといつてもなかなか…。

吉田：その辺は、稲盛さんは…？

松山：まあ、稲盛さんは成功されましたからね。

崎元：稲盛和夫氏は若い時は恵まれなかったですよ。試験を受けても、鹿大を出ても、企業を起こしてもはじめはうまくいかん訳でしょう？

松山：稲盛さんは非常に稀有な方といふか、最初、人工ダイヤか何かされていましたでしょ？

吉田：最初は碍子ですよ。そこに入るようになったので、入来粘土の研究をされて。松風工業という小さな会社に入られて、そこで、セラミックの研究と出会って、本腰を入れて研究しているうちに上司にその仕事を取り上げられて、周囲の人が援助されて小さい、京都セラミックという会社を起こされたのですよね。

松山：セラミックの評価が世の中で定まるのは少し後ですね。あれで非常にラッキーな面があったのでしょう。それをものにするのはその人の能力でしょうがね。

崎元：くじけない。

松山：そういう意味では郷中教育ですよ。負けるな…。

吉田：先ほど、松山さんが封印された話をされましたが、稲盛さんも会社を作られた時からずっと薩摩の思想を持ち続けておられたか分からない所もある訳ですよ。

松山：私は中学校の時に東京に行ってしまいましたが、鹿児島といふのは必要なければほとんど言いませんでした。鹿児島の人には上からみると非常に扱いにくい訳ですよ。

吉田：今、敢えて鹿児島出身といわなかったといわれましたが、明治の頃は薩摩は政界、官界、実業界に非常に大きな影響力を持ちましたが…。

松山：薩摩閥といいますが、その後は長州閥ですよ。西南戦争の後には、世渡りのうまい長州閥が抑えて行くわけで、薩長連合しましたが、ちょっとやはり薩摩と長州は違うのですよ。その後の日本を抑えて行くのは長州ですね。

吉田：未だに総理大臣を一番出しているのは山口ですからね。

崎元：経済面では薩摩には「子孫の為に美田を残さず」といふのはありましたね。

松山：大体、鹿児島の場合、軍人、教員。お金を貯め込んでという人はいないのです。鹿児島は教育県ですよ。しかし、その割に東大、九大とかなど良い所にいてもその後は中央で活躍せず、鹿児島に帰ってくる人も多いですよ。

吉田：文化の事ですが、曾我どんの傘焼き、水神さんなど、稲盛さんは生まれは薬師町ですが、お父さんが小山田らしいですが、当時の子どもが鹿児島の文化からどんな影響を受けたか分かりますかね？郷中教育とは別の側面ですが。

松山：小山田はかくれ念仏ですよ。甲突川の源流のところですよ。あそこは水神さんと

いうか…

吉田：この前、小山田を通り、この辺だったのかと思いましたが。

崎元：かくれ念仏は…特に廃仏毀釈が薩摩藩は激しかったですからね。

吉田：薩摩藩が一番、廃仏毀釈が激しかったようですね。

崎元：前に鹿児島大におられた桃園恵慎先生が「かくれ念仏」の専門です。

松山：鹿大の先生だったのですか。

吉田：稲盛さんが幼少期にどんな青年だったかをお聞き出来れば…。

崎元：子分を引き連れてガキ大将…。

吉田：一番のガキ大将は10人くらい率いているのですか。

崎元：そうですね。喧嘩が強くて。

松山：学舎同志の覇権争いですよ。市内に学舎がいくつかあってお互いに叩きあいでした。我々も小学校の時から、今日は草牟田をやっつけに行こうとか、どこをやっつけに行こうとか昔からでした。

崎元：とにかく、強気な元気な子どもを育てるという事で、むしろ大人たちも黙って見ていたわけですよ。仲間内の喧嘩ではなく、仲間内は仲良くして外との喧嘩ですね。

吉田：学舎同志の喧嘩というのは、昔の方限同志の喧嘩というような感じですか。

崎元：そうですね。我々は外の小学校との争いですね…。中学に来てそれぞれの小学校から来ていて、転校生は睨まれるのですね。

崎元：平岡さんと言う人の書かれたものを読んでごらん下さい。4年生の時に転校して来た。お父さんは海軍大佐をしていた。海軍兵学校の教員ですね。最後は横須賀に派遣された。小学校が一緒に友達でした。それから岩重和義、拾い読みしなさい。面白く書いています。

吉田：この年齢の方々はほとんどの方はこの地区におられますか？

崎元：そうですね。還暦の時に同窓会をしました。今まで続いてきた同窓会に女性も入れてやろうという事で。130周年記念の時に稲盛和夫が来ていました。その前の日はホテル京セラに泊まりました。その翌日、一緒に話をして講演をしてもらいました。その時、自彊学舎も見学しました。

吉田：その時の写真がこれですかね？これだと思うのですが。

崎元・松山：これですね。稲盛さん写っていますね。

崎元：これですね。そばにいました。

吉田：これをみていると稲盛さんは、ガキ大将になったと書いてありますが。

松山：ガキ大将もいろいろあるのです。

吉田：なるほど…。

崎元：カリスマではない…。

松山：いろいろ聞くと、昔からカリスマ性が備わっていた人というよりも、成功して行くに従ってカリスマ性を増して来たのではないですかね。

吉田：写真を見てもそうですね。松下さんもだんだん顔が変わってきていますが…。

崎元：顔は変わってきていますね。文集にえこひいきに反発したというのを書かれていますね。

吉田：でもこれは、世の中に公表されていますものね。

崎元：不運であっても、ものにして行ったというのがすごいですね。親父さんが良かったのですね。厳しくてもよく分かってくれる。

吉田：ここに書いておられますね。

崎元：彼は社員を非常に大事にしていますね。しかし、一面、非常に厳しく、運転事故を起こした人を即クビにするくらいだと社員から聞いた事があります。

吉田：本日はどうも有り難うございました。

●インタビュー 2

「稲盛和夫さんの鹿児島時代を探る。特に自彊学舎、郷中教育が与えた影響について」

【日時】平成22年3月18日 18：00～21：00

【場所】自彊学舎

【聞き手】吉田健一（鹿児島大学稲盛アカデミー特任講師）

【インタビュー対象者】

A：吉村松治理事長氏

B：宮内信正氏（兄：現理事長）

C：東久雄氏

D：宮内博史氏（弟）

E：松山道氏

F：税所篤央氏

◎稲盛和夫さんが京都に行かれるまでの人格形成について……

——子どものころに薩摩の文化や風土から影響を受けたということだ。郷中教育そのものについての研究はあるが、実際に昭和初期の方がどういう教育を受けたのか、特に西田小学校の様子や西田学区の子どもたちの様子はどうであったか聞きたい。

【郷中教育について】

——稲盛さんはその自伝で郷中教育の影響を受けたと書いているが、自彊学舎には入っていなかったということらしい。では学舎に入っていない子どもも郷中教育の影響を受けていたとすると、地域でどういう教育が日常的にされていたのか。

C：この『あしたうらら』を読むと、学校の先生が詳しくいろいろなやらせていたようだ。自彊学舎ではおもに薬丸自顕流をやっていた。立木は宮内先生のおじさんが東郷示現流で、二十歳前後のころに自彊学舎でもやったことがある。私の時代（戦争前）はまだ学校では示現流をしていなかった。稲盛さんは私より3歳年下で、私の弟と同じ年。同級生の池田さんという人は舎に来ていた。もう一人、連れてこられた子がいたが、焚き木の上に座らされたのがいやで逃げ出して、上級生が捕まえに行ったがとうとう帰らなかったと書いてある。当時は16学舎で競争していて妙円寺詣りなどの行事があれば募集していたから、初めはそれで来たのだろう。

A：郷中教育は数十年前から盛んに言われるようになったが、郷中教育がある頃は、そう

という言葉はなかった。郷中（ごじゅう）というのは、郷の中でしているから郷中教育なのではない。昔は舎でなくても、町内会でも郷中教育が行われていた。郷と中（じゅう）は別である。海軍でいう“郷に入っては郷に従え”の郷。その行政区の中にいろんな法律、決まりがある。中というのは、“なか”という意味でなく、重箱の重と同じ意味あいを持つ。“話し合い中（じゅう）”というのが舎でもどこでもあった。たとえば班長さんたちが公民館などで、20人以内の少人数で話し合い中というのをやって充実していた。各家庭を回って話をするということもあった。非常に民主的なやり方をしていた。

——郷中とは方限（ほうぎり）のことか？

A：郷中とはその話し合い中のこと。話し合い中は「咄相中」（はなしあいじゅう）と書く。中（じゅう）というのは、人の家庭に入るとそのすべてが見えるが、その中で子どもの教育とか進路などを話し合い、いい方向に持っていくことだ。その中（じゅう）と、法律を持つ郷とが融合して“郷中”と言うようになった。もっとも民主的なやり方である。

【月照の話】

A：鹿児島は貧乏な人が多かったから、反骨精神、野党精神が盛んであった。藤崎剛という人が昨年、薩摩義士のことで、グループで岐阜県に行った帰り、京都の清水寺系の成就院に行った。西郷隆盛と僧月照が会った場所はロープが張ってあり、初めは見ることはできなかったが、交渉して見せてもらった。“西郷隆盛と月照が会った場所”は今でも見せるわけにいかないということだろう。そのほかいろいろ話を聞いたが、“昭和幕府”とでもいうのか、そういう考えが今でもあるのだろうと、ひがんだ見方をしている。

——月照さんの墓は鹿児島にあるが、碑が京都にもあって両方行ったが。

C：私たちが小さい頃、月照の命日だったのか南洲寺（南林寺町、松原山南林寺あと、月照上人の墓）に行ったことがある。夜だったから眠かったし、畳の上で脚は痛かったしというのを覚えている。自彊学舎の人たちだけだったが、どうしてだったか。

A：月照は幕府から追われていて西郷が薩摩に行けとすすめた。薩摩藩は幕府を倒そうと勇んでいたが、月照が来ても放ったらかしだった。だから西郷さんがあわてて帰ってきて、ともに海に入った。

——薩摩藩は月照に冷たかったのか。

A：幕府が怖かっただろうと思う。

——倒幕の原動力になるのに、まだその当時はそれほどでもなかったのか。

C：殿様のほうが怖かった。下級武士は倒幕の精神が高まっていたが、まだその頃は藩としては藩主が怖かったのだろう。日向に行かされるということは、途中で殺されるということだったから（それは見捨てられたということだろう）。

（藩主：忠義、久光の子、久光は国父、後見人）

C：鹿児島から大隅、日向へやるということは、その途中の国境あたりで殺すということ。

E：それまで、そういう例が多かったということか。

C：そうだ。だから覚悟を決めて海に入った。

D：“東目おくり”とかいう言葉がある。

B：たぶん薩摩藩は、月照は殺しても西郷さんは殺さなかつたらう。それが分かっていたから西郷は一緒に入水したのだらう。

A：そのときの船は高級な屋形船で、平野国臣、桐野利秋、別府晋介など多くの人が見送りとして同船していたようだ。その船から飛び降りたのを、磯の漁民が見ていたらしい。(月照は40代、西郷は32歳ぐらい)

【示現流、学舎の話】

——稲盛さんが幼少期に受けた影響について伺いたい。先ほど薬丸自顕流と東郷示現流の話が出たが、その頃、男の子はみんな示現流をやらされたのか。

A：男の子はほとんど学校でもやらされたし、舎でもやっていた。舎は薬丸だったが。宮内信正さんのおじさんが、私が西田小六年のときの担任で、頭もよくなぜられた(たたかれた)。だから甥御さんたちを少しかわいがろうかと思ったら民主主義になっていて、そういうことはしてはいけないと言われた。

B：先ほど言われた“話し合い中”という考えもいいが、普通はひとつの行政単位を郷中と言っていた。方限は鹿児島市内だけで使っていたもので、方限と郷中とはまた別。鹿児島市以外では吉田とか、そういう地理的な区分けの意味もある。郷中教育は鹿児島市内だけでやっていたのではなく、県内どこでもあった。教員として地方をまわって気づくことだが、セクトというか地域の意識がかなり強い。それは島津さんの教えもあるのだらう。先ほども出たが、切磋琢磨というか競い合わせる場所があった。同じ西田方限でも、西田と常盤、常盤と原良、西田と原良といった小さな地域同士で石の投げ合いをするとか。子どもの頃からそういう意識が植えつけられていた。

C：だからある程度大きくなって別な場所に行った場合、鹿児島の間人はものすごく団結力が強い。

A：西田橋を越えたら大変なもので、あっちの学校の子に負けるなど。個人的な思い出だが、武岡に墓参りに行くときも西田小の学帽を隠して行った。向こうの学校の子たちに見つかったら「ちょっと来い」といっていじめられる。それぐらいのことがあった。

E：前の『舎史』に学舎同士のけんかのことが書いてある。警察が入って大騒動だったようだ。

A：学舎同士、学校同士、やっていた。

E：信さんたちの頃は激しいのがあったんじゃないか。

B：いやいや。ただ女の子と喋ったらたたかれたとか。新聞沙汰になったとか。道のころじゃないか。新聞に載ったのは。

E：誤解ですよ。

B：鶴丸高校で彼が2年生のとき3年生の不良を集めて、たたいたり投げたりした。“一中んグランド”というのはそういうけんかの場だった。彼より1つ上の人たちが不良グループとけんかになって、10人ぐらいの対抗戦になって、こっちのほうが強かった。そのときに警察が入った。

E：昭和36年ぐらい。13か14の頃の話だ。

——先ほど女性と話したらたたかれたとあったが、30年代でもまだそういう気風があった

のか。稲盛さんは昭和のはじめだからもっと厳しかったらうか。(今78歳で昭和7年1月生まれ)

【稲盛さんの住まい】

C：舎で私の下にいたのは吉国、直方、猿渡、上田潮、そして私の弟。自彊学舎には稲盛さんは来ていたようではなかった。

F：その頃、稲盛さんの家はどこだったらうか。

C：おそらく、薬師町の島津どんの住宅だったと思う。

F：島津興業のとなりだったか。今の城西1丁目。

E：昔の鹿児島実業高校の新上橋寄り。

C：あの一角がおそらくは全部、島津家の土地で、家はそれぞれ建てていた。その頃そこだけが整地されていた。

——稲盛さんの父親は小山田の出身で、そこへ引っ越してきたようだが、そこは新しい人が住むところだったのか。

B：あそこは、それ以前はそういう住宅ではなかった。

F：道路は4メートルぐらいしかないが、当時としてはきれいに区画整理がされたところ。

A：市内でも早く区画整理がされた場所だ。島津どんの屋敷といていた。

——殿様が持っていたのか。

F：屋敷ではなく島津住宅と言っていた。土地を貸していたのだと思う。

C：昭和10年ごろには、もうあの住宅はあったはず。そこから城西本通りの大きな本屋(TSUTAYA)のところに、製紙場と言っていたが日本澱粉の工場があって、そこから永吉のほうはずっと田んぼ。こちらはいまの城西中学校があって川のほうに実業高校、そしてそこからまたずっと田んぼだった。道路に面して何軒かずつ家があったが、ほとんど田んぼだった。刑務所の周りにも住宅が少しあったが、裏はほとんど田んぼだった。

——薬師町は古くからあって、いま城西となっているところが新しいということか。

……薬師は一番広がった。薬師の一部が城西となった。

(江戸時代の古地図を出して説明)

——島津住宅に越してきた人は郡部のほうが多かったのか。

……まあそうらう。

B：薬師町の向こうの鷹師町が、江戸時代は郡部の人に来て住んだところだ。

C：甲突川からこっちは昔は鹿児島市ではなかったと言っていたらう。ただ西田から常盤は参勤交代の国道になっていたから周辺に人家があった。それ以外は田んぼだったと考えていい。

……西田というくらいだから。

C：川の堤防の高さが両岸で違った。大雨が降って川が氾濫したら、向こうは大丈夫。こっちは側は低くなっていて、田んぼに流れるようになっていた。

F 遊水池だった。

——西田には武家屋敷も多かったようだが。

C：参勤交代の国道で、ここから伊集院を通過して熊本へ行った。西田は鹿児島県の入り口だ

ったから、周辺にはいわゆる武士がいた。川を渡ると千石馬場で、そこには千石取りの偉い武士が住んでいた。だから千石馬場という。

B：田舎の殿様が住んでいて、税は田舎で取る。篤姫だってそう。指宿の殿様といってもお屋敷はこっちにあったわけだ。

【稲盛さんの暮らし】

C：稲盛さんのいた小山田の辺りは農家が多い。郡山に行くと少し士族がいた。私達のころは戸籍に士族と平民の区別がしてあった。

B：稲盛さんの戸籍は平民になっているはずだ。

F：稲盛さんのお父さんは何をされていたのか。

—印刷屋さんをされていたようだ。岬市（けさいち）さんといわれるが。

A：おそらく小山田町で生まれて島津どんの土地の辺りで印刷所をしようと、つまり進出されたのだろう。

C：鹿児島に来てから印刷業を始めたのではないか。

—はい。稲盛さん自身も子どものころ紙袋を作って行商をしていたということだ。その頃のことに詳しい方がおられないか。

……本人のことはどうも…。

B：あの頃大学までいけたというのは裕福だったのか。

—それは違うようだ。高校に行くときも反対されたがせめて高校だけはと出してもらい、大学は自分で学費を稼ぐことを条件に行かせてもらったということだ。

F：終戦直後のことでみんなが貧しかった。大学に行くのに親に金を送ってもらうというようなことは考えられなかった。

C：うちの弟と同級だ。弟は工業高校だが、『あしたうらら』に書いている人の80%は一中出身だ。（私達以外に）もう一人、横川のほうから5年の頃、西田小に転校してきた子もいた。田舎にいてはどこにも行けないということで、当時から西田小は有名だったのだろう。ちょうど弟の頃は、旧制中学校から一年延長すれば新制高等学校卒業になるという時期で、新制高校の第一期生だった。弟も頭がいいほうだったから、まわりでは「次雄だけは大学に行かせたほうがいい」という話があった。私なんかは旧制の中学しか出ていないのだが、次雄は末っ子だったから、親父に言わせれば、子どもはみんな同じように教育を受けさせて、あとは大学に行きたければ「我がでせえ（自分でしろ）」と。その当時は親の考えはそうだった。

—稲盛さんもそう書いていますね。「我がでせえ」と言われたと。

A：みんな貧しかったからそうだった。「お前はびんたが良か（頭がいいから）学校へ行け」と。郷中とはそういうことだ。貧しければ工場で働けとか、相乗的な話し合いをする。最も民主的なやり方だった。稲盛さんは私より3つ上だが、舎に行っていれば10や20上でもみんな知っている。だから稲盛さんは舎にはご縁がなかったということだろう。でもその頃はみんな郷中教育だ。その言葉は使っていないが。

B：私が思うに戦時中のことだから、小山田から来て少し遠慮されていたのではないか。もともと西田にいれば遠慮なく来ていたと思う。西田小は出ているけど、その頃は少しばかり身分のことなどがあったのではないか。

【戦後の自彊学舎】

C：うちも農民、平民だ。でもさっき言ったように、妙円寺詣りとか曾我どんの傘焼きとかあれば、ほかの舎に負けたくないから人を増やす。もともとは士族の子弟の集まりだったが。

——曾我どんの傘焼きもですか。

C：士族の子弟がまず始めた。

……伝統文化を受け継いだわけだから。

C：昔からすれば戦前といえども少し進歩していたし、そのうち国民皆兵となって実際には士族も平民もなかった。だから舎としては人数を集めなくてはいけないから、妙円寺詣りのときには募集があって、友達を連れて来いというようなことだった。妙円寺詣りのときは西田は黒山の人ばかりで、みんな威張って歩いた。

——戦時中もですか。

C：20年は焼け野原だったからなかったが、19年はあったはずだ。

E：戦後はGHQから休止命令があったのか。

C：そうじゃないが、実際に舎の運営はできなかった。連合軍から舎をどうこうせよということもなかった。

A：ないけれども、“舎と言うな”という時代だった。

B：武道もなにもできなかった。

A：武道もだし、舎ではなく“児童塾”と言うようにと言われた。

——GHQは神道指令というのを出しているが、具体的に自彊学舎みたいなものへの何か指令があったのか。

F：それはなかった。学校教育については奉安殿をどうかというのはあったが。

C：軍閥に関係する行事は全部止めよということになっただけのことだ。妙円寺詣りはそれに引っかかってはいない。

F：ローカルなやつだから。

——そこは少し不思議だったのだが。GHQは制度改革をやったあとに日本の精神を根絶やしにするためにいろんなことをやったわけだが、南の端の鹿児島の郷中教育もつかんでいたのか。

A：そこまで掌握はできなかつただろう。

E：だけど『舎史』の前ものには、活動がなかなかできなかつたと書いてある。

——おとといの話では、再建がなつたのが29年なので、世の中の風潮として活動しにくかつたのか、それともやはり戦後の占領政策の中でやるなということだったのか。

……それはなかつただろう。

F：その証拠にはルース台風は昭和26年の10月だが、そのときは妙円寺詣りには行つた。それでいくと26年には明らかに復活していた。

C：そうではなく、運営ができなかつたということ。

F：それは拠りどころがなかつたということだな。焼け野が原で。

——それで少し分かりました。

E：焼け野が原なのに妙円寺詣りには行つたのか。

- C：ほかの舎は知らないが自彊学舎のことを言えば、まず戦争が終わって毛唐さん（外国人のこと）と巡查さんが入ってきたわけだ。士官学校と海兵（海軍兵学校生）が、悲憤慷慨して帰ってきた。そして舎をどうにかしないといけないという話になった。外便所がひとつ焼け残っていたのを解体して、1坪半ほどの小屋を自分たちでつくった。そして毎晩みんながそこに集まった。あちこちの畑から野菜を失敬したり、先輩たちの家から果物や鶏を失敬したりして、4、5人でたかっていた。ひと月のうち半分も家には帰らなかったというか、夜遅くまでそこにいた。
- F 終戦直後は舎屋がなかったから、焼け残った先輩の家で寄り合いをしていた。その後西田の公民館のようなものができたので、そこを借りてやっていた。そのうちに舎屋を再建しようという話が出て、ここができたということだ。

【戦後の鹿児島】

- C：あの頃、甲突川の河口あたりで、女性がアメリカ兵を相手にしていた。
——鹿児島でもあったのか。進駐軍がきたのか。
- E：常盤町でもいたという。
- A：天保山、今の与次郎で…。
- C：連合軍は今の甲南高校（二中）のところに常駐して、そこが兵舎のようになった。そのとき私はもう旧制中学を卒業していて仕事はないし、焼け跡整理をしていたが、町内会の隣組から何人か出さなくてはいけないとなって、アメリカ軍がいるところの掃除をしたり、武岡から砲弾を海に捨てに行ったりしなくてはいけないという。最早徴用で、俺達のような17、8の青年が引っ張り出された。
- F：二中に軍令部というのがあって、軍政部が市役所の中にあった。県庁は6月17日の大空襲で焼けて無かった。一時だけ市外に移っていた時代があったな。七高も出水市に移ったことがあった。市役所の本館は焼け残ったから軍政部が入っていて、金ぴかの連中がいくつか部屋を持っていた。
- C：市立病院にもなっていたようだ。
- F：市立病院は1階の北側だった。
- C：個人的なことだが、その頃、鹿児島造船に働きに行きはじめで、ステンレスの丸鋼がたくさんあったからそれで指輪を作っていた。そこにカツオ船が入っていて、船員が指輪を欲しがるのでカツオ一匹と交換していた。
- D：船員はそれを女にやって…。
- C：そのとおり。
——それは戦後ですか。先ほど昭和30年頃でも、女性と話すと上の人からたたかれたと言われたが。
- C：戦時中は兄妹でも一緒に歩いたら…。学校でも男女別々だったのだから。小学校6年まではそうで、高等科に行くと学校自体が男女別々だった。西田小には女子の高等科があって草牟田小からも来ていた。男は中洲のほうにほとんど行っていた。そこで鍛えられた。

【鹿児島県の女性】

——ちょっと質問ですが、今は親子チャレンジ塾とかでお母さんも女の子も入っているが、昔の自彊学舎、郷中教育は、女の子は対象になっていなかったですよ。男の子だけ。……全く。

——戦後民主主義の流れを受けてそうなったのか。

B：平成になってから変えた。それまでは母親も門から入れなかった。平成10年前ぐらいからだ。女も入れないといけないとなった。

F：女子も入れないと維持できなくなった。子どもの数が少なくなったから。

——でも薩摩の昔の本を読むと、決して男尊女卑ではなくて、女の人は家で強いということで。私の妻が子どものソフトボールをやっていると、お母さんの力は本当は強いんだけど、会長は男でないとだめだと。その辺りは鹿児島県の文化なのかなと思う。

B：それは全国どこでも共通ではないか。

C：鹿児島県の女性はあくまでも男を立てていた。

F：昔の人はね。

——今は立てないですか。鹿児島県でもそうになっていますか。

B：文化的になったのよ。

E：昔は物干し竿に、物がかかってなくてもくぐったらだめと言われた。

F：それは勿論だ。

C：うちの親父は、家に帰ってくる時、100メートルばかり手前から、今日はなんて言って叱ろうかと考えながら帰ってきていた、そんな親父だった。物干し竿が斜めになっていればそれを種に山芋を掘った（焼酎を飲んで長々と小言を言った）。庭に箒の目がついていなければ、子どもはおてちき（とことん）叱られた。

——維新ふるさと館に行ったとき、薩摩の女性の代表的な人として、東郷平八郎の母親の薩英戦争のときの逸話があった（握り飯の話）。それは時代的なものなのか、昔は日本全体がそうだったということか。あるいは、やはりそれを超えて鹿児島県の風土として、表にはだんなさんを立ててというところがあるのか。

A：日本全国どこでもでしょうが、とくに薩摩は、というのはある。これは時代を問わず今でもそうだ。ここにいる人たちは奥さんの手のひらで生活しているんだから。今の時代は違う。女性は表に出る。パートに行かなければ飯が食えない。昔の女性は本当の家内だった。子どもを守り、家を守り、男を立てる。

——なぜこんなことを聞いたかという、私自身が鹿児島県に来てそれを感じるということもあるが、稲盛さんも自伝の中で書いている。畷市さんというお父さんが、物静かで温厚な方だったらしい。お母さんも薩摩おごじよで、表向きはおとなしい方なんだけど芯が強かったらしく、外でけんかして負けてくると「やり返してこい」と。お母さんは社交的で明るくて芯が強くて、かつ出しゃばらないというようなことが書いてある。

A：大正生まれまでだな。やはり今は表面上の勝負だからね。男もそうだ。

F：戦前のお母さん方は非常に強かったと思うね。負けて帰ってくるものならそれはやかましく、もう一回行かされた。

F：男に産んだ意味がないと。

A：女性は、表面上は夫を立てているけど芯は燃えているんですよ。私はうちのばあさんがいなければ舎には来ていない。

F：この方のおばあさんは強くてね。われわれが遊びに行っても怒られる。

C：私達の年代は、鹿児島だけでもないだろうが、あれもするな、これもするな、するのはけんかだけ、戦争するだけという教育を受けてきた。戦争がすんだ時点で、15、6の一番多感な時期で、頭が固まりつつあるときに、180度ひっくり返ったわけでしょう。

【空襲と疎開】

——その辺をお聞きしたい。稲盛さんも戦争の時代に生まれて、当時は軍国少年とか軍国主義とは言わなかったですよ。

C：当時は言わない。戦後の造語だ。

F：ただ政府が発行するポスターなどに“軍国少年化”という言葉はあった。

——当時から出ていましたか。

F：軍国とか軍神とかあった。

C：軍国主義が植えつけられていた。

F：小学校の運動会で、ルーズベルトとかチャーチルなどの書き割があって、それに水をかけて倒れたら“万歳”とか…。

C：だから戦争に負けてアメリカ軍が進駐してくると大変だと。

——先日、半藤一利さんという方が書いた『昭和史』という本を見たら、本当に進駐軍が来たら男は奴隷になって女は妾になると思っていたとあった。でも実感としてどうだったのか。

C：それは役所からそういう連絡があったんだから。

——でも戦後の政府は、そんなことは絶対ないから、進駐軍が来てもそのまま生活してくださいというお達しをしたとか。

C：そういう先生が一人おられた。絶対そういうことはないからと。

F：マスコミがしっかりしていたわけでもないし。

C：いろんなデマが入ってきて、みんな同調して逃げたんだから。

F：見たことがないわけだから。

C：昔日本人がシナに行って結構いじめたわけだ。強姦はするし食料はかっぱらうし、それをイメージして、戦争に負ければ同じ目に遭うと。とにかく奴らは鬼だと。鬼畜米英だと、鬼だという感覚で教育されてきているし。

F：志布志湾に上陸用舟艇がくるとか言われて、相当大隅のほうでは緊張したらしい。

C：そのための兵隊は南九州に集結していたんですよ。戦争が終わる前は。

F：まだ内之浦にはトーチカとかが残っている。

A：やはり教育は徹底していた。20年の終戦前の頃には疎開して穴倉生活をした。

——疎開はどこに。

A：私は郡山です。そこに行く前に家の近くの防空壕で4日間ぐらい生活した。

——そうですか。疎開について聞こうと思ったんですが、鹿児島は疎開というものがなくて、帰農しなくて、強制疎開はなかったと聞いたんですが。

- A：強制はないけど自主的にしないといけないから。
- C：6月の17日に大空襲があったでしょう。あれで現実にさらされたわけだ。だから焼け残った人たちも昼間は家に帰っても、夜は自分のところでは寝ない。私達は300、400メートル離れた山の中にちょっとした小屋を作って、晩はそこで眠った。
- D：街の人たちも常盤のほうで防空壕を掘っていた。
- A：ただ、うちは薬師に近い常盤だったが、8月6日に焼けた。6月17日には殆どが焼けた。——7割ほど焼けたといわれていますね。
- F：この辺で言えば、ここから下の西田が焼けて上のほう常盤はあまり焼けなかった。
- A：上のほうは8月6日に焼けたもんだから、その2日ぐらいあとに、郡山に歩いて疎開した。
- ちょうど広島に原爆が落とされた頃ですね。
- A：風船爆弾とかが落とされるといいう情報はあった。
- 事前にあったんですか。
- A：ありましたね。どういうものだったか。ラジオじゃないわけだから。
- F：私はバッチ爆弾とか覚えているが。
- A：まあ、いろいろな言い方はあるだろうが。
- ちょうど広島にそういう惨劇があった日に、鹿児島でもあったんですか。
- C：それは全国どこでもあったでしょう。鹿児島は4月と6月17日が一番大きいでしょう。そのあと鹿児島駅がやられたね。これは焼夷弾じゃなくて爆弾だった。
- F：その前に新上橋がやられた。4月の8日。私は4月に鷹師町にいた。新上橋がやられたということで上之園に移った。そしたら6月の17日にやられて防空壕に3日ぐらいいて、それから川内に行った。川内がまた空襲を受けてとうとう出水に行った。出水は駅の近くだけやられた。
- C：4月の8日は、30分ぐらい前に新上橋を電車で伊敷へ行った。そしたらどーっと音がして「避難しろ、避難しろ」とみんなが叫ぶが、どこへ避難したらいいか。道路際の軒下にて新上橋のほうを見たら、鹿児島は全部やられているように見えた。真っ黒になって…。
- A：その日のことを語らせれば、私は誰より体験をしている。4月8日は日曜日だった。国民学校の始業式は7日からだった。前日に始業式があったはずだがそれは覚えていない。日曜日だったので買い出しに連れて行くといわれて新しいズック袋を提げて二軒茶屋(谷山)まで行った。そのとき落ちたんですよ。農家の人約束を守らなくて米を人に売ってしまっていた。もし約束を守っていたら、空襲に遭って死んでいた。帰りに見たら40メートルぐらいの穴が開いていた。
- C：よく分かったな(米軍は)、あそこに飛行機会社があったのを。
- A：鴨池海軍航空隊があった。
- C：航空隊はやられなかったのか。
- A：航空隊はみんなブーンと逃げるんですよ。
- C：俺は学校が唐湊だったから、空襲警報ではなく、鴨池の飛行機がどんどん上がるのを見て、“ああグラマンが来るぞ”と。鴨池の飛行機が上がると、垂水のほうからグラマンが来ていた。その頃はアメリカは急降下はできないと言っていたが、グラマンは20

機ほど編隊を組んでくる。鴨池のところに来たら一気にきれいに急降下する。

- A：4月8日のことか。
C：いやそのあと。8日はB29だった。
D：抵抗しないから演習だな、まるで。
C：いや、2機ぐらいは落としたいらしい。
D：迎撃してはいたのか。
C：鴨池辺りにいる船の上から撃ったとっていた。敵機は宇宿のほうに落ちて、落下傘は紫原に落ちたようだ。それを捕まえて涙橋の防空壕に連れて行った。私はそれを見に行ったことがある。
A：宇宿の郷土史にも書いてある。
D：捕虜はどうしたのだろう。
…：どうしたか分からないが…。

【学校も村も教えは同じ】

- 昭和の初期の西田学区の子どもさんはどれぐらいいたのか。全体の子どもの数と自彊学舎に来ていた子どもの数は。
C：2,600人。西田小学校全体で。
—そう聞きました。一学年360人で
C：1クラスが、写真で数えてみたら65人ぐらいいた。
—そのうち男の子が半分として、1,300人のうち学舎に来ていたのはどれぐらいいたのか。
B：ごくエリート。ほんの10人かそこら。0.何%。
—じゃあ、学舎に来ていなかったからといってどうということもなくて。
C：原良村自体が学舎と同じような教育をしていた。
F：学校自体がそうだった。
—そこをもう少しお聞きしたい。普通の時間割がありますね。そのほかに郷中教育と同じような教育の時間は放課後にあっただけですか。それとも授業が始まる前とか。あるいは普通の科目を教えながらその精神が入っていたのか。
C：舎は放課後であって、3時ごろからやっていた。
F：今の学童保育のようなものだ。いまは親が働いているから預かる。でも昔も同じようなものだった。山や田んぼに行って家に母親はいなかった。
—では自彊学舎だから郷中教育が受けられたというわけではなく、普通の学校教育の中でそれがあつたということか。
B：市内の学舎は全部そうだ。
C：その差というのは、学校は戦争のために軍国教育をやった。でも学校が終わると子どもは自由だった。その頃は舎でなくても、学校がすんだからといって勉強するわけでもなく、かばんを放り投げたら異年齢の子たちと遊びに行くものだった。
—その遊びの中で、年上が年下を導くということがあつたのか。
B：そこまで理想的なことではなかった。
C：ただ、舎にすればいろいろな制約があつた。
A：郷中というのは話し合い中だけれども、学校は学校で話し合い中がある。ただ、昔の

舎は学童保育と違って精神的なものは強かった。学校で行うのも町内会で行うのも郷中教育ではあるが、舎は特別だった。打ったりたたいたりするところで、行きたくないところだった。そういう濃縮したところが舎なんだ。

【詮議とは】

——詮議というのは当時もやっていたのか。

F：詮議ばかり。毎週あった。

B：制約があるというのはそういうこと。たとえば立って、歩きながら飴を食べていた。誰も見ていないと思っても、一緒にいた子が、飴を分けてやらなかったばかりに「飴を立ち食いしていた」と報告して先輩からたたかれる。

C：積善会というのが一週間に1回あった。

B：善を責める会だよ。

F：積む会だよ、本当は。でも積善会というより、悪いことをしなかったかということ。

B：いわゆる反省会みたいなものだよ。

C：青年（当時の中学生。今なら高校生）が幼年（小学校以下）の子をみんな座らせて「目をつぶれ」と。そして「立ち食いした子は手をあげよ」。

D：自己申告だ。

——そこで嘘をつくことはできるが、それはしないということか。

B：誰かが見てるとということ。手をあげなかったばかりに散々たたかれるんだから。

F：まず「目をつぶれ」そして、「立ち食いをせんかったか」。手をあげなければ「本当にせんかったか」とくる。すると少し心にやましいところがあるのでそっと手をあげると、やられるわけです。

——でも嘘をつくより、自分から悪いことをしたというほうがまだいいわけですね。

F：そう。だけれども一発はたたかれるわけですよ。

A：天文館あたりで女子と手をつないでいたのを見られるとたたかれるから、隠し通してね。

F：でも嘘をついてもそれがばれたらもっとやられるからね。

——ということは嘘をついても逃げ通せるわけではないということか。

……それは無理。どこかで分かる。目をつぶるということはそういうこと。誰か見ていたかも知れないと思うと…。

——自分の良心に…。

B：今の理事長が課していた罰というのは、もし嘘をついたとなれば、角のある焚き木をたくさん下に敷いて座らせて、ふくらはぎと腿の間にもまた焚き木を挟ませて、それで座れと言う。いたいけな小学生にやっていたんですよ。それを僕らは耐えてきた。

C：時代劇で出てくる石を抱かせたりする拷問と同じだ。

——それを一週間に1回やるんですか。だから効き目があったんでしょうね。

F：毎週やっていた。まわりには一銭店屋（駄菓子屋）がたくさんあって、立ち食いしたいんだけど、舎に来ていた連中は一切しなかったと思う。

A：なぜそんなに厳しいのか聞いたことがある。そしたら舎生というのは紳士なんだと。紳士にならなくてはいけないと。だから腹が減っていても必死だった。紳士というの

はどんなもんなのかと思っていた。

F：小学2、3年の小さい子どもは本気で泣いていた。

——理事長の頃はとうだったか。

C：この人たちの頃はもっとのびのびとやっていた。いじめはなかった。

——先の天文館での例は理事長では。

B：この方は東京にいたから銀座あたりで…。

——東京にいらしたのですか。

A：いろいろ事情があって。うちは貧乏だったので、拓殖大学に西郷隆秀という理事長がいて、お金はいらさないから来いと言ってくれた。

——その頃から陶芸を。

A：まだやっていなかった。チベットに行きたくて行ったが、うちが貧乏だったから帰ってきて焼き物をやり始めた。

B：とにかくこの人たちが帰ってきて20代の青年のころ、やんちゃをたくさんしていたから、親の世代から言われたのが、「あんな馬鹿になるな」と。

——理事長は今おいくつですか。

A：74歳の若輩者でございます。(笑)

——拓殖大学といえば鈴木宗男代議士の。

A：彼は私の70歳の祝いのあとだったか鹿児島に来てくれた。よく知っている。

——中川代議士の秘書をやっていた。

A：ああ、あれはつまらんことをした。

……腹を切ったか。

……いや首をつった。

……今頃、腹を切るやつはいない。

——松岡利勝元農水相とか。

……腹を切ったのは三島由紀夫。

A：要するに舎は平和なところ。超民主主義のところ。エリートを育てるところなんです。

——分かります。一番感銘を受けるのが、徹底的な話し合いをするというところ。郷中教育の一番の柱。暴力というよりまず話し合いがあると。

B：それは少し違う。確かに子どものころ、二十歳ぐらいになるまでは暴力を受けることもいろいろある。でも自分が指導する立場になったらそれはなく、徹底して話し合う。

F：暴力というけれどそれはない。

——言葉は悪いかも知れないが、徹底的に話し合うということと、上の人からは「議を言うな」という、このことはどう考えればいいか。

B：子どもは1つ年が違えば上的人是は神様。言葉遣いまで全部違う。

D：鹿児島は確かにそうだ。目上の人に対する態度と下に対する態度はぜんぜん違う。

B：二十歳を過ぎたらいっぱい言ってもいい。長老（おせ）になったら、徹底的に話し合える。

E：私など45年鹿児島を離れていたから、そこまでたどり着けなかったんだな。ただ「議を言うな」で、ぼこぼこにやられた。

C：道はあまりたたかれなかった。打たれずに逆に打ってるだろう。

E：私はほとんど打ってないよ。

C：舎以外の人をよく打っていた。

B：中学校2年で3年生を打てるというのはすごい。伝説の人ですよ。

F：お父さんは緻密な人だった。漢文学者。

——儒者でもあったんですか。

E：いや、中国にしばらくいたことがある。

——先祖が藩に仕えた儒者だったということは。

……それもない。

B：加世田、いまの南さつまの出身です。薬師には田舎から出てきた人が多くて、市や県の役には非常に立った。中級、下級官僚というところだ。

F：出水はご存じか。私は出水の出身です。

A：出水のものすごくいいところの人。

【軍国少年の戦後】

——もう少しインタビューを。鹿児島大空襲のときの様子を聞いたが、7割焼けたということは建物もそれだけ焼けて死傷者も多かったと思うが、当時の子どもの様子はどうだったか。稲盛さんも実家が焼けて、「市民の命日」ということを書いているが。それまで日本は正しい、戦争に勝つと教えられてきて、郷中教育は軍国主義とびたっとあった部分もあると思うが、反戦の思想というものもそんなになかったのではないか。勝つと思っていたところに大空襲があつて、どうだったか。

C：社会的な考えを持っているような人はみんな牢屋に入れられたからね。でも勝つと思っていたのは（開戦後）1年半ぐらいのことだ。18年ごろまでは行け行けどんどんでやっていた。ミッドウエー海戦にしても負けているとは言わないわけだから。

F：情報が入ってこないから仕方がない。ラジオと新聞しかなくて、ラジオは軍が抑えていたから。

C：まず東京が大空襲を受けて、その頃、終戦の半年ぐらい前あたりから感じていた。

F：うすうすは感じていた。父親が「日本はだめかもね」というようなことを言ったのを子ども心に覚えている。

E：でもそれをはっきり口に出したらだめ。

——隣組とか。

E：隣組がまた怖い。

C：それを口に出したらいかん。引っ張られるとか。非国民と。

——当時は鹿児島でも特高警察がいたか。

C：それは僕なんかでは分からない。憲兵というのはいた。

A：陸軍憲兵と海軍憲兵だった。海軍といえば当時もう非国民のような軍隊だった。17年ごろには、この戦争はもうやめなくてはいけないと言っていたが、陸軍が内閣を制していたから行け行けとなった。当時テレビはなかったがラジオがあった。大本営発表で、日本の飛行機が何機かやられても「1機やられた」、アメリカの飛行機は1機やっても「10機やった」と。それは戦後分かったことだけど。陸軍が制していたから。海軍の言うことを聞いておればここまでなかっただろう。

- C：学校の先生もうすうす分かっていても、それを子どもに言うわけにいかない。
- F：その頃、学校に配属将校というのがいた。
- B：軍から学校に配属されていた。
- F：現役を辞めた軍人たちが各中等学校に全部、一人か二人か配属された。少佐とか中佐とかより下の連中かな。
- B：鹿児島一中は陸軍中佐ですよ。
- A：牛島満。
- B：牛島じゃない。
- A：牛島ですよ。そのあとは岩山。いや違った、岩山さん。岩山さんのお父さんだ。
- F：この舎の長の村山さんは鹿児島高校の配属将校だった。
- E：配属将校は何をしていたんですか。教科を教えるのではなく単に管理監督だけか。
- B：校長先生以上だ。
- C：日本全部を軍が掌握している時代だから。
——軍の位で言えばどの。
- A：中佐が多いが、尉官もいた。
——徴兵された人がなれる最高位が大尉だから、中佐ということは位が高い。ということは職業軍人か。
- A：そう職業軍人だ。
- F：退官した人が行った。
- B：それはちょっとあとのことで、昭和になると現役の軍人が勉強のために学校に行った。
- F：村山さんは私の家の隣だったが、馬引きがいて馬に乗って行ってた。
- A：村山さんは岩山さんのあとだった。だいたい2年間だった。
- C：さっきの話に帰るが、その当時は軍部が掌握していたわけだから。
——大空襲のあとと先とで意識は変わったか。
- C：それは負けることが分かっていたから。
——大空襲の前から分かっていたのか。
- C：空襲は6月で終戦の2カ月前ぐらいだから、半年ぐらいの間に人の気持ちは変わるものではない。まだ何とかやれるという気持ちはみんなもっていたというか、強制的にそういう気持ちにさせられていた。
——終戦ぎりぎりの頃の自彊学舎の活動はどんな感じだったか。休止ですか。
- F：舎の何のという時代じゃなかった。妙円寺詣りもなかったと思う。
- C：舎屋も6月に焼けたし学校も焼けたんだから。舎どころじゃなかった。
- D：塾だと考えてみたらいい。戦争になっても、夜になってから塾に行きますか。
- C：終戦になって、戦前の教育を徹底的に叩き込まれていたのが17歳の頃かな、急に自由主義になったんだから。いま民主主義というのがその頃は自由主義だから。アメリカが、まず華族制度を打ち壊し、天皇制も壊そうとしたが、これを壊すと大変だということで天皇制だけは残した。そうやって自由にしているところに、自彊学舎の場合は福永敬造さんという人が帰ってきた。福永さんは陸士で、卒業していないから、まだ戦争には行ってない。そして同じ年で一中の人が海兵に二人いて、その人たちも終戦で帰ってきた。帰ってきたら鹿児島は焼け野原で大変だったから、どうにかしないとい

けない。彼らは戦前の教育が徹底していたから、どうにかしないといけないということで自彊学舎は始まった。

B：だから今の自彊学舎の原点はそこだ。海兵と陸士の、戦争にいけなかった怨念がずっと入っているんだ。

——戦争が終わってしまったからですね。そこで、戦争が終わって良かったと思っている人も多かったと思うが、陸士の人や海軍兵学校でエリートだった人たちは、良かったというより…。

B：残念だよ。

——私の父のいとこが京都の人ですが、江田島の海軍兵学校で秀才だったので、白い軍服、サーベルで帰ったら憧れの的だったが、戦争が終わったら一切軍隊の話をしなくなったという話を聞いた。

D：京都の場合は特殊で、私も46年から55年まで京都を担当していたが、生きて帰ってこれた。戦死は犬死にだと。そういう温度差がある。鹿児島は徹底的に戦え、国の誉れだということがあるが、関西方面は死んでしまったら何もできない。歴史の違いとか。鹿児島は何もない。から芋しかできない。向こうは都だから食べ物も集まってくるし。そこは歴史的な背景がぜんぜん違う。

【西郷と大久保、評価の変遷】

C：京都とかは昔から戦乱に遭っているところだ。鹿児島は結構戦争をしているが負け戦ばかりだ。

——でも一新のときは…。

C：あの時も西郷は負けた。

——でもあの時薩摩は分裂して、西郷方と大久保方に別れて、西郷従道は…。

C：だから鹿児島は大久保という言葉は禁句なんだ。

D：昭和40年ごろまででしょう。

B：私は市役所の文化課というところにいたが、東京から問い合わせがある。たとえば黒田清隆の墓はどこにあるかと聞かれる。それはすぐ近くに、青山墓地にありますから行ってみてくださいと。でも、西郷従道の墓はどこですか。南洲墓地にありませんかと。絶対ありません。あつたら多分倒されて、遺体の下に敷く石になってしまうでしょうと。それぐらいのものです。明治以降、東京に出て行って偉くなった人の墓はこっちは全然ない。

D：全部引き上げていってる。

——西郷隆盛の墓はありますね。

D：西郷家はある。大久保はない。大山にしろ誰にしろ。

C：鹿児島では西郷さん一辺倒で。

B：靖国神社に行ったら大久保はあつて西郷さんはない。

(西郷と大久保の話)

F：大久保の子孫は鹿児島にはいないが、東京から来て話をしたことがあつて聞きに行った。そのときは、大久保が死んだときに国葬になった、そのことしか言わなかった。

A：日本に国葬は3人しかいない……

F：総務省に行くと大久保がばっと出てくる。

E：県外では大久保でしょう。

A：政治家の7割8割は大久保だ。

E：冷静に見たら大久保ですよ。

—その冷静に見たら、ということについて。政治家としての資質は政治学者たちは大久保を高く評価するのは分かる。山県有朋もそうだが。でも薩摩においてはやはり西郷さんで、大久保というのはちょっと…。その中で稲盛さんが絶妙なエッセイを書いていて、西郷と大久保の両方から学ぶべきと。

…：それはそうですよ。当然です。

—自分は会社を創るまでは西郷さん一辺倒でやってきたが、京セラを創って企業を営し始めてからは、西郷さんの志を守るだけでは経営はできないと思った。私も大胆なことを言うと、この鹿児島で『あしたうらら』の中で南洲翁遺訓の注釈も書いている稲盛さんが、「一方では経営的なことでは大久保にも学んできた」と書いているということは、薩摩の人としてはどうですか。

E：それは当たり前でしょう。

B：よく分かるのは、西郷さんは郷の経営はできる。大久保さんは郷を飛び越えた大きな経営ができた人。西郷さんは京都も花のお江戸にも行っていろいろした後、帰ってきましたね。でも大久保さんは行きっぱなしで、帰ってこようと思ったかもしれないが途中で殺されてしまった。あれが帰ってきていればぜんぜん違ったと思う。

—稲盛さん自身は、もともとは西郷さんのことを書かれている。(朗読)「私は経営者になって初めて大久保利通のすばらしさに気がついた」

E：西郷さんというのは非合理だ。

C：自彊学舎といっしょだ。よそを見てきた人は新しい目がある。地元にいる人はそれが理解できない。

D：出て行った人とそうでない人は目線が違う。

C：稲盛さんもここにいる頃は西郷さんで育てているはず。

—稲盛さんも本当に尊敬しているのは西郷さんだが、経営になると、涙を吞んで大久保になったと。

B：だから合理なんですよ。

D：生々しきで生きていくときには大久保みたいにならないといかんと。西郷さんは情に厚いが、それだけでは経営ができないということでしょう。

B：やっぱり経営は大久保だ。西郷だったら儲かってはいないだろう。…でも地ならしをしたのは西郷だと思う。

C：大久保は薩摩を二分したように言われているけれど、大久保が暗殺されて薩摩は廃れた。あとは木戸孝允とか伊藤博文とか山口の人たちが日本をつくったような格好になった。今でもそうだ。

B：日本の標準語も長州弁だ。

—東京の山の手の言葉でなくて…。

B：でありますとか、…でしょうかとか。「で」があるのは全部長州の言葉だ。

—松山さん、その後の日本は長州が支配したというのがありますが、今でもそういうの

があるのかもしれないですね。

C：明治維新から130年経ってもやっぱり山口が日本のリーダー…。

B：高知県の知事さんと話してみるといい。これは高知県の知事さんが言っていることだ。

E：でも山口を意識しているのは鹿児島だけで、ほかの県の人は何も意識してない。

—この間、松山さんが薩長同盟といっても…と話していらしたが、これは西南戦争以降の薩摩人の…。

E：鹿児島の人みんなそう思っているよ。

F：明治10年の戦はどう思われますか。京都、東京から見たらどういう評価をされているのだろうか。

B：せっかく落ち着いたのに、何をまた騒動し始めたのだろうかというところだろうか。

—やはりそれは南洲翁遺訓にもあるように…。

F：西郷さんというのはそんなに全国的に有名だったのか。

C：庄内からも西南戦争に従軍している人がいるんだからね。

E：東京から見た評価は、これで日本が落ち着いたと。要するに当時いた不満分子を全部片付けてくれた。そのための役回りを果たしたというのが評価ですよ。不満分子を束ねて“俺と一緒に死ね”と言えるのは西郷さんしかいなかった。国家はどうしてもそのことが必要だった。中央の評価としてはその役割では非常に大きかった。要するに西郷さんはテロリストですよ。国家が収まらないときに取る手立ては、一つは対外的な戦争。それができないときは内乱です。それができたことが大きかった。それが一般的な評価だと思う。

—それは私もそうだと思うが、でも東京にも西郷さんの銅像が建っている。これについてある人が書いていたのが、日本はそこがすごいところだ。西郷さんは一時的に賊軍の汚名を着たが、明治維新に功績があったということで明治天皇から正三位を贈られたわけだが、その銅像を上野公園に建てるというのがすごい。旧ソ連なら、赤の広場にスターリンやレーニンにたてついたトロツキーの像を建てるようなことで、そんなことはありえない。上野公園に建てていることは、いかに西郷さんが尊敬されているかということ、日本国家との一体感を持っているということの表れだ、というようなことを誰かが書いていた。

B：10年に1回ぐらい東京に行くが、上野公園に興味があって行ってみたら、西郷さんの銅像のすぐ近くに篤姫の時代の寛永寺があった。東京芸術大学もあるらしい。

—先ほどの話に戻るが、維新ふるさと館に行くと、あそこの中は西郷、大久保が半分半分だが。

E：それは公の建物だから。県とか市とか。国の補助金が入っているし。

—鹿児島の人がよくここまで受け入れるようになったなあと。

B：ここ2、30年前の話をしてほしい。今の人は何も考えていない。

F：ほとんど勉強していない。

E：今の人はそんなに意識していない。

—教科書の中の人物でしかない。

B：われわれの親父の代は爺さんから生々しいことを聞いている。でも今になったら。あれから100年ですよ。

【方限、地名について】

—ある方に聞いたのは、大久保の銅像が建ったのは、西南戦争を経験している人がいなくなっただと。でも、はじめは卵がぶつけられたと。鹿児島県警の前に川路利良の銅像が建ったときも護衛がついたというぐらいで…。

B：川路は当時鹿児島にいれば自彊学舎ですよ。鷹師町、薬師町だから。優秀な人は下級官吏をする。自彊学舎じゃないが西田方限だから先輩として…。

E：小山田のほう、皆与志じゃなかったか。

B：だから優秀な人はみなこっちに出てきた。

—森有礼さんも山手のほうに住んでいたとか。

B：あそこは一番偉い人がいた。上町。方限で言えば、上方限、下方限、西田方限の3つしかなかった。三方限。

—三方限は上荒田も入っているのでは。

B：あっちの三方限とは違う。上町方限というのは上下土、お城より長田陸橋のほうに川があってそこが上方限、下方限は西郷さんたちが住んでいた中央高校からあっちのほう、それ以外の侍は足軽、西田方限。参勤交代のとき荷物を持ったりする人もいないといけなんでしょう。殿様はお風呂に入るからと風呂桶まで担いでいったんですよ。だから大事にされたんですよ。

—荒田のほうは。

B：あそこは田んぼ。

E：荒田というのは荒れた田んぼ。

C：甲突川の上流の伊敷のほうからずっと水が流れて行って、小野、永吉、原良と全部農地だったから灌漑するために、山手にずっと用水路をつくって荒田まで行ってた。

B：建部神社の下から。

—荒田八幡は古いのか。

B：荒田八幡は昔からあった。あれしかなかった。荒田八幡は四隨身といって4つ。自分の土地をするのに、田上の新川のところの橋と、甲南高校のところにもその隨身がある。

—上荒田も下荒田もおなじようなものか。

B：方限は18ある。鹿児島市内に郷中はない。郷中というのは地方です。市内は方限なんです。

—今でいう鹿児島市の中央部か。

B：そうだ。といっても人が住んでいたところだけ。上町、下町、西田。今の永吉町から武町まで全部。ものすごく広い。それが西武田村となった。これは、西田、武町、田上。

—『舎史』にも税所さんが書かれたものが。

B：それに元が書いてあるから。

—1回読みました。もう1回読みます。

B：西郷、大久保が下級武士というが、県庁でいえば課長ぐらいの家庭の人たち。係長以下はこっち、薬師、鷹師に住んでいた。

C：薬師、鷹師の意味は、くすり師、鷹匠が多かったから。

B：私の家は鷹匠かも。

(戦争には次男、三男に行かせて長男は残した)

B：戊辰戦争まではそうだったが、西南戦争の時には長男しか残っていなかったから、早く子孫を残そうとした。

——郷中教育などで“男女席を同じうせず”とかいって、結婚はどうしたか。

B：親が言うとおりに。選べなかった。

(夜這いの話)

——郷中教育は厳しかったのに夜這いとは。

C：それは地方が、といえは語弊があるが、農村には青年団があって、まず目星をつけた女性に歌を…。

B：ものには踏むべき順序がある。

C：その頃の女性はよく三味線を弾いていた。

——郷中教育の厳しさの中で、詮議があるのに、女子と男子と出会う場はないのでは。

(中学校になったら打たれなかった。地方はゆるかった…)

——戦前と戦後では違ったのか。

C：戦後は自由恋愛だが、戦前は語る場はなかった。

(詮議は昼のことだけ。夜は見えないから誰も言わない。想像だけ)

F：ただ、舎には50人、60人といたが誰もけんかをしない。本当のけんかをすることがない。叱られたことはあるけど、けんかをしたのは見たことがない。

B：序列が決まっているから。一緒に生活している家庭のようなものだから。

——兄と弟のようなものか。

B：もちろん。

——縦は分かりました。同学年の序列はどうなるのか。

B：それはすぐ入れ替わる。

C：私もそうだったが、転校生はけんかの対象。

B：入り者(いりもん)だったんだな。

C：だからまず適当なやつにけんかをさせる。

——けんかを好まない男の子はどうするのか。

B：好まなくてもやらせる。

C：俺なんかやっせんば(弱虫)だったから、やられるわけだ。転校生でも勝てば一目置かれる。でも私が助かったのは、自彊学舎に入って先輩がいたから。そのおかげで洗礼を受けずにすんだ。

【稲盛さんの立場】

——ガキ大将について。稲盛さんが小学校入学までは弱虫だったが、小学校に入ったらガキ大将だったと書いている。でも先日話を聞いた崎元先生は、そうはいつでもせいぜい5人ぐらい手下がいる程度のもので、たいしたガキ大将ではなかったと。ガキ大将にもランクがあるのか。

D：それはあるでしょう。

B：西田の130周年のとき稲盛さんが来たが、さっきの古地図を広げたら、あの人は甲突

川のところをずっと見ていた。そして自分が育ったところ、島津住宅を見ていた。“甲突川において、フナやドジョウやダツマ（エビ）を獲っていた。食料調達をしていた”。僕にはそういうふうには話された。だからあの人は舎に来る暇はなかったはずだ。

A：俺なんかよっぽど暇だったと。

B：お前様（おまんさあ）は家に帰っても父親がいなくて言うことを聞かないから、おばあさんが舎に出したと聞いているよ。

C：どちらかという、子ども時代にいろんなことがスムーズにいったらいいだろう。一回一回挫折して、社会に出るまで挫折の連続だったんじゃないか。

A：そうだろうね。川の流れをじっと見ていたというが。信長が小さい頃焚き火をするのに火の燃えるのをずっと見ていたそうだ。その間いろんなことを考えるんでしょう。

F：あの人は仏門に入られたが、すごいと思うよ。

B：そこからまた生々しい世界に…。

C：道なんか、名古屋で悠々自適に暮らせばいいのに、難儀しに鹿児島に帰ってきて…。

——先ほど大久保が薩摩に帰ってきていたらという話が出たが。私の立場で言うのは何ですが、稲盛さんももう78歳ですから、ここで鹿児島に帰ってきたらもっと…。

B：いや、もう帰ってこないほうがいい。大久保さんと一緒に。

——宮内さんは大久保さんと同じだと思っていらっしゃるんですか。立場を考えながらざっくばらんに言うと、稲盛さんはものすごく鹿児島に対する愛着が強い。なぜ私がこういうことをしているかということも…。この稲盛アカデミーを作って…。ものすごい愛着がある。

B：帰れないから愛着がある。

E：お子さんはいるのか。

（男の子はいない。女の子だけだと鹿児島に帰ろうという気にはならないのでは）

——でも故郷に錦を飾りたいという気持ちはあるんじゃないか。

A：そうじゃなくてね、稲盛さんは鹿児島大学に稲盛会館を作って、でも帰れないということではなくね、何も無い、ゴザ一枚のところに来て「いけんごわすか（どうですか）」と、「焼酎は飲まないよ、お茶を飲もうか」と、そういう雰囲気を作るべきじゃないかと思う。

B：だからあの島津住宅のところに、小さな土地を買って眠ればものすごく幸せだろう。

——本人がどう思っているのか分からないが、稲盛さんほどの方なら、そんな話をすればそうされるのではないか。

B：桃ヶ岡に幽棲の地を作ってもらわないと。

A：たとえば家賃10万ばかりの家を借りてでもいい。失礼な言い方だが、今日のご馳走をしたからと。これぐらいのものでいい。営業とかではなく、人脈を大事にされればいいと思う。

【稲盛さんを培った環境】

——稲盛さんが自伝の中で郷中教育とか示現流のことを書いているのは。

B：その中で培われたものがあるということ。もうだめだと思って落伍するか、立ち上がるか、人の価値はそこにあるんだと思う。

——先輩のお考えだと稲盛さんが、京セラを作ってから右肩上がりだが、それまでの苦労があって、いろんな不運の中で、それに負けずにいかれたのはやはり薩摩の郷中教育の精神をもたれていたというふうに。

B：考え方は一緒だ。われわれがこうして弱虫だったのが、たたかれ打たれてきたのを何とか我慢してきた。

——それは戦後のことか。戦前もそうだったのか。

B：僕の場合はね。戦後はまたそれを若い人たちに、しつけというか指導してきた。それは学校ではできないことだ。たとえばスポーツの集まりだと同じ年代のものだから、一度縁を切れてしまえばあとのつながりはない。それを一生続けているのが学舎なんです。

——稲盛さんは学舎には来ていなかったが、その精神を持っておくべきだというふうに思っていたと考えてもいいでしょうか。

B：それはさっきから言っているようにね。

A：一つ教えておこう。京都伏見の寺田屋事件で、松山さんのひいおじいさんの兄弟が殺されている。一番若かった弟子丸龍助。有馬新七側についていた。だまされてついていったのよ。さっき一中のグラウンドでのけんかの話をしたが、気性がものすごく荒い。今でこそ優しいが。頭はいいし体はいいし心は強い。自彊学舎始まって以来の秀才。戦前はこの人のお父さんだったな。

——ひいおじいさんの頃は幕末なんですね。そういうことを薩摩の人は知っているのか。

A：知らない。図書館に本がある。

——今の日本を見ていて、何とかしたいと思って鹿児島に来たんですが、先輩達から見て今の薩摩の若者はどういうふうに映っていますか。

A：それを育てるためにがんばっている。鹿児島の親は最近金があるから、よそに出す。よそにやれば立派になって帰ってくるというのが鹿児島の（考え方だが、それは違う）。

F：それがだめなのよね。

——薩摩で生まれ薩摩で育った人が明治維新をやった。

A：知らなかったからできたんですよ。

——学生の中から日本を何とかするような人材を。

A：一週間に一回実体験を、ぜひやらしてほしい。

——よろしくお願ひします。本日は、有り難うございました。

※ 「——」は聞き手の吉田。話し手が「……」となっているのは、文字起こしの際に、声の主を正確には判別できなかったもの。